

---

# ツアラトゥストラはかく語りき

ミラージュ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツアラトウストラはかく語りき

### 【Nコード】

N3873F

### 【作者名】

ミラージュ

### 【あらすじ】

今、世の中は混乱の時代へと突入しようとしています。戦争、内紛、テロ行為、民族対立、核の恐怖、地球温暖化、生態系の環境変化、食糧難、経済不安、それによる失業者や貧困層の増加、そして教育現場の崩壊……。一体それらは何が原因で、なぜ起こってしまったのか？そして、私達人間はこれからの時代をどの様にして生きていくべきなのか？そんな難解な社会問題に、無謀にも足を突っ込んでみたコメディ（？）作品です。ぶっ壊れミラージュ無責任爆弾小説第二弾、投下！

## ワルキューレの騎行（前書き）

この作品は現在連載している『Be ambitious!』からのスピンオフ作品となっております。

時期設定は本編の第49話から第55話までの間の頃で、主要キャラクターの一人である松本翼の母親、松本美香が仕事の為にある小学校に訪れた時に遭遇した出来事をまとめたお話になっております。筆者自身が今までに書いた事のない難解な問題に足を踏み込んでしまった今作品、どうぞ寛大な温かい目線で読んで戴けると幸いです。宜しくお願い致します。

鈴婆こと森川鈴子が波乱万丈の人生の末に大往生を遂げる。その訃報を聞いた三人の中心的人物、渡瀬虎太郎はふと鈴婆との最後の思い出になったその五年前の出来事を振り返る……。

内容は酷く脱力した大バカコメディーになっておりますので、本編を知らない方でも楽しめるかと思えます。

若干長い作品ですが宜しくお願い致します。

## ワルキューレの騎行

演説、それは観客を魅力し熱中させる人類史最古のパフォーマンスであり、地球上の生物で唯一言葉を操る人間だけが天から授かった意志の表現方法です。しかし、それは反論の余地すら与えないほどの圧倒的な言語力と確かな知識、豊富な経験、そして何より人々を感動させる熱い情熱がなければ、世間から拒絶されるどころかその演説の場に立つ事すら叶いません。世を悟り、人生を見極めた者のみこそが許された権力の象徴の場なのです。

これは私、松本美香が県立青少年センターで行われる教育問題に関する講演会に出席する為に茨城県を訪れた時のお話です。ゴールデンウィークの三連休の一日目に県内に入った私は少し観光をして英気を養い、二日目に予定の講演会場へと向かいました。

「……現在、日本の教育環境は崩壊寸前、非常に混沌とした暗黒の時代に突入しようとしています、学校内での生徒同士のいじめ、教育者のレベル低下、それに伴う近年の若者による異常犯罪の増加、そして家庭内では母親が自ら愛する子供の命を奪ってしまうといった痛ましい事件も頻繁に……」

大学で世界史を専攻していた私は、世界各国で常に問題視されている宗教・民族対立などを題材にした著書や諸外国でのボランティア活動等が国内の教育機関に認められ、四年前に四十代前半という若さで中央教育審議会委員に選出されました。

「……でも、考えてみて下さい、『教育』とは一体何の為に存在するのでしょうか？ 一流企業に入社するのに有名大学に進学する為？ 厳しい競争社会を勝ち抜くのに闘争心を養う為？ それもあるでしょう、私はそれを否定しません、しかし……」

その活動の一環として、良く各地の講演会や大学の特別講師として招待される事がありまして、日本全国をあちろちらと歩き回る忙しい毎日を送っています。

「……『教育』とは『命』を学ぶ場なのです、この世界で何よりも尊いもの、それは人の命です、動物、植物、昆虫、全ての命です、『命』を学んでこそ人は『一つのもの』に対し愛しむ心を学び、それに知りたい、近づきたいと思う気持ちから『学習』という行動を取る様になるのです……」

しかし、どんなに大変なスケジュールであろうとも、私は弱気を吐いている余裕などありません。これは私が自分自身で選んだ道であり、世界で今も起こっている対立や差別により苦しんでいる人々の為、そして何より『生きる』という素晴らしさを私に教えてくれた闘病中の夫と可愛い娘達を支えていく為なのですから、辛いなんて言ってられません。

「……勉強が好きな子供なんてほとんどいないのが当たり前なんです、思い出して下さい、皆さんもそうだったでしょう？ それは、

『教育』が子供達を愛していないからです、愛してくれないものに  
対して愛してくれと言われても無理なんです、これは国家レベルの  
教育機関だけの話ではありません、子供達と一番近い場所で接する  
教育者、そしてお父さんお母さん、皆さんの『愛』が必要なんです  
……」

もう四年近くも経つと、次第にこの生活にも随分て順応してきました。  
でも、私も主婦の一人です。自分にだって大切な家族がいます。  
特に病院で一人残され看護婦さんに鼻の下を伸ばしている新作くん  
の浮気……。

……ううん、失礼しました。一人闘病生活を続ける夫や家に残した  
娘達が心配ですし、とても寂しい思いをさせてしまっていると自分  
でも承知していますが、これが私の生まれてきた使命なんだと理解  
して貰えています。

「……どうか、子供達を愛してあげて下さい、子供達に精一杯の愛  
情を降り注いであげて下さい、そうすれば、子供達は必ずこちらに  
振り向き私達の話に耳を傾けてくれるはずです……、お時間が迫っ  
てきた様なので、私の演説はこれで終わらせて戴きます……」

ふう、今回も何とか無事に講演会を終わらせる事が出来ました。慣  
れたものとはいえ、やはり毎回緊張します。会場から聞こえてくる  
拍手と客席の人々の笑顔が私の次の仕事場へと向かわせてくれる一  
番の栄養剤です。自分の思想に同意をして戴けるという事がどれだ  
け難しく大変な事なのか、これまでの人生経験で嫌というほど痛感  
させられてきましたからね。

「……それでは松本さん、お疲れのところを申し訳ありませんが、明日の特別顧問の件も宜しくお願い致します……」

今だから言える事です、私はこれまでも国交レベルの人道的保護の為の説得会議や、武装を固めた過激派の宗教団体と人質解放の交渉に望んだ事もありました。我が身の危険を感じた場面もたくさんありました。それでも、私は蓄えてきた知識と必死の交渉で何とかこれらの修羅場を潜り抜けてきたんです。

しかし、そんな場慣れした私でも、今回の件ばかりはどうにもこうにもなりませんでした。

講演会の翌日の三連休半ば、私は茨城に訪れる直前に急遽依頼を受けてある市立小学校の学校側特別顧問として保護者相談会に参加させて戴きました。この小学校では、全国区のニュースでも取り上げられた『ある問題』が勃発していたからです。

「……えー、ご紹介致します、こちらは文部科学省の中央教育審議会の委員を務められていらっしゃってます松本……」

「そんな事はどうでもいいのよ！ 私達は校長やあなた達先生方がどう思ってるから聞いているの……！」

「教育機関の偉い人を呼んだら私達保護者が怖がつて黙り込むのも思ったの!? 冗談じゃないわ、学校利用者をナメてんの!? 誰が学費払ってこの学校を支えてると思ってるの!?」

「部外者なんかには無い！ 校長、謝りなさい！ うちの息子ばかりに不利な成績や勉強内容を押し付けて！ すぐに今の担任をクビにして新しい担任をつけなさいよ！？」

そうです、俗に言う『モンスターペアレント』と言うアレです。最近、様々な教育現場で多発している現代特有の社会問題なのですが、特にこの小学校ではそれにより女性教師が一人精神を病み病院送りにされ、初老の男性教頭に至っては先日自殺未遂事件を起こし全国ニュースになってしまったのです。

「……あの、只今ご紹介に挙がりました松本美香と申します、今回は学校側と保護者様方々との亀裂を修復して親密な関係を築く為に特別顧問として学校側から依頼を……」

「あんた誰？ 何しに来たの？ 特別顧問って何様のつもり！？ よその人間が口挟む事なんかじゃないのよ、学校側が私達の言う事を利かないからみんな怒ってんのよ！！」

「……いや、ですから、教育の現場では保護者様が仰られる全てのご意見を承る事が出来ない様々な事情も抱えておりまして、それらを踏まえてお互いが納得出来る対話を進行出来る様に……」

「ねえ、おばさん？ こっちはせつかくの連休の時間を作ってわざわざここにやって来てんの、話し合いとか妥協とか有り得ないから！」

「つーか、マジでかったりい、早く終わらせて遊び行きてえんですけど？」



「女なんか連れてきて話し合いが進むとも思ってたのかよ!? 学校はどこまで俺達保護者をナメてるんだ!?」

集まった保護者側には母親と思しき女性が大多数。その世代は私と歳の近い四十代くらいの人から明らかに二十代前半、あるいはまさか十代ではないかと思えるギャル系メイクとファッションをしたヤンママも数人いました。男性の姿もちらちらといましたが、そのほとんどの人が髪の毛を染めた短気そうな怖い雰囲気を帯びていました。

しかしそれ以上に私がこの相談会の場に来て一番驚いたのは、この学校の危機感のかけらすら感じられないずさんな対応でした。

相談会と言う大切な意見交換の会場に用意したのはろくに整備や掃除もされていない廃れた体育館。そこへ無機質にパイプ椅子を並べ自分達は講壇の上から見下ろす朝礼スタイル。

それどころか、保護者側に手渡すべき学校側の理念や改善策などをまとめた資料すら何も用意していない酷い有り様。もちろん、私はすぐに担当者呼びいい加減過ぎるこの状況を厳重注意しました。

「……これは一体、どういう事ですか!?」

「……えっ? 何かマズい事でも?」

「当たり前じゃないですか!? これは大切な子供達を我々教育者に預けて下さってくれている保護者様を招待しての大切な相談会の場なんですよ!? それを無作為に椅子を並べただけ、資料も説明

文も進行プログラムですら準備されていない！　こんな粗末な扱い方をされて、あなたがもし保護者側の人間だとしたらあまりに失礼な話だとは思いませんか！？」

「……はあ、いや、自分は独身なもので、保護者側になって考えてみると言われてもいまいちピンと……」

「第一、なぜ学校側の人間達が講壇の上に陣取り保護者側を見下ろす様な配置をしているんですか！？　教育者と保護者は常に平等の立場で、同じ目線で子供達を見守ってあげなければならぬのに、こんな状態でまともに相談会が出来ると思いますか！？」

「……はあ、いつも朝礼では生徒をこの様に並べていましたから、同じ様にすればまあ無難かなと思ひまして……」

「大至急、保護者がここに到着する前に配置を変更して下さい！　会場そのものを変更するのは流石に今からでは時間が無さ過ぎるでしょうから、せめて学校側の机と椅子を下に降ろして保護者側と同じ目線にして下さい！」

相談会が始まる前に何とか講壇上の机と椅子を保護者側と同じ高さの場所に移動させましたが、私はすっかり呆れてしまいました。保護者が学校に対して牙を剥き出して襲いかかる様になってしまう理由とは、大概のケース最初は学校側に問題があったりするものなのです。

この小学校の騒動も元は生徒同士で行われていた集団いじめを放置し、一人の生徒が登校拒否になってしまった事が発端でした。それでもまだいじめは収まらず、現在問題視されている『学校裏サイト』での陰湿な中傷、そして他の生徒へいじめが連鎖して悪化渦を辿り、

最後はいじめ隠蔽をし続けた学校側が事実が公に晒され謝罪する結末になったのです。

『なぜ、うちの子供ばかりが悪い者呼ばわりされなきゃいけないのよ！？　そもそもはいじめの温床を作ってそれを見抜けなかったあんた達学校側の責任でしょう！？』

『これでうちの娘までいじめられるようになったらどうしてくれるんだ！？　学校は暴力や差別を教える場なのかよ！？　そっちで起こった問題なんだから、お前らが全部責任取れよ！？』

『家庭内での教育が悪い！？　余計なお世話よ！　人の家庭にまでいちいち干渉する気なの！？　　うちは共働きだからいちいち子供に構ってる暇なんか無いのよ！　　第一、そんな事を言う権限があんだ達学校側にあるの！？』

こうなってしまうと、どんなに正論を述べても学校側の言葉に威厳などありません。次々と降りかかる苦情にひたすら頭を下げ続けるのみです。この時点で、平等でなくてはならないお互いの関係は完全にバランスが乱れ、信頼関係は脆くも崩壊してしまうのです。

後はもう雪崩の様に壊滅の道を辿ります。

保護者側の発言力はさらに勢いと横暴さを増し、学校側に注文する要望は次々とエスカレートしていきます。そこに、高額な授業料で高度の学問が学べる学習塾の存在や『お客様優先』という企業社会の風潮も相まって、いつの間にか教育の現場は『教え、育む』の精神から『サービス中心』のスタイルへと変貌してしまったのです。

「学校っていうのは子供達を預かって育てる為にあるんでしょ？  
その為に先生達がいるんでしょ？ だったら子供達が楽しく勉強するのに必要な、保護者の要望を受け入れるのは当然の事じゃないの！？」  
それが出来ないんだったら教育者失格よ、失格！！」

「……確かに、学校とは子供達に必要な教育の場を提供し、教育者は自らが学び蓄えた知識や教養で子供達を指導する為に存在します、しかしですね皆さん、教育の場と言うものは、様々な環境で暮らす子供全員が平等に教養を……」

「ただでさえ厳しい生活費の中からわざわざ学費払って学校行かせるのよ！？ そこからさらに給食費だの遠足費だの頼んでもいない有料サービスをしてお金払わせて、こんなの詐欺よ詐欺！ 今まで払った学費全部返しなさいよ！？」

「……ですから、教育と言うものは、学校の中で様々な人との出会いや交流、様々な学術や貴重な体験を得る機会を与える場であって、そこから子供達が人間の命の尊さや素晴らしさに気付き自らの意志で学習を……」

「雑巾ぐらいそつちで用意しろ！ 何で雑巾ごときわざわざこつちが用意しなきゃいけないんだよ！？ 俺は女房がガキ置いて逃げちまって、仕事と遊びで忙しくてチマチマ裁縫なんかやってられる訳がねーだろうがよ！？ 教科書代も値段が高いし、他の教材も買わせるだけ買わせて後は自発的に勉強しろだって！？ 阿漕な商売しやがって、ふざけんじゃねーぞオイ！！」

「……商売だなんて、教育は損得勘定でやっている訳ではありませんん！ その費用は経済的に恵まれていない子供達への援助や、新たな学習設備の設置などに使われるのであって、決して個人や団体の

利益になるわけではありません！ 企業の資金運営とは全く違うものなんです！ 教育の場とは、子供達の将来の飛躍への基盤を作る為に必要不可欠なものなんです！」

これくらいのモンスターペアレントなら、私は以前にも別の教育現場で何度か遭遇した事がありました。相手の言い分を認めてしまつたら負けです。何しろ、決してへこたれずに説得するしか無いのです。その時は保護者の方々に私達の熱意が通じて、自らが幼き頃に受けた教育の有り難みを思い出して貰え、事態を収拾する事が出来たのですが……。

「ねえ、おばさん？ まだ続けんの？ あたし達、もうウンザリなんだけど？」

世代交代の流れは思いのほか早いものです。私達が学び育ってきた頃からはすでに一時代が過ぎ去り、日本の教育が綻びが見え始めた飽食の世代を過ごした人間達が子供を産み、親となる時代がやって来たのです。

「つかさ、うちのガキって学校から帰ってくるとギャーギャー騒いで超ウザいんだよね、もう面倒臭いから学校が一日中預かってくれたら良いのにな？」

「……えっ？」

「そうそうそう、ガキ持ちだとさ、せっかく合コンで捕まえた男が

さっさと逃げちゃうんだよね、マジですっげえ迷惑」

「……迷、惑？」

「もうさ、学校も委託所みたいに二十四時間で預かってくんない？  
最近、親もガキ預かってくれなくなっちゃってさ、マジ邪魔なん  
だよ、邪魔！ こっちは金払ってんだからそれくらいサービスしろ  
って！」

「マジ？ アンタ金なんか払ってんの？ バカじゃん！？ あたし  
なんて一銭も金払ってないよ？ 全部親持ちっ！」

「毎日仕事して疲れて帰ってきてんのに、休みの日まで子供がドタ  
バタ暴れてこっちはゆっくり寝てもいられねーんだよ！ ひっ叩い  
てやりやあギャーギャー泣き喚きやがって、面倒臭えから日曜も学  
校で預かってくれよ！？」

この子達にどんなに一生懸命教育の真意を語っても効果などありま  
せん。一切の常識、道徳が通用しないのです。これではもう正常な  
対話を続行していくのは困難、ほぼ不可能です。悲しいですが、こ  
の『両親のモラルの低下』こそが今現在日本の教育界が一番頭を悩  
ます最大の問題なのです。

モンスターペアレント騒動、それは学校側の徹底的な改善と教育者  
それぞれの意識レベルの向上、そして保護者側『全員』の納得が得  
られない限り決着はつきません。一度狂いだしてしまったバランス  
はこの様な大きな勘違いなどさらなる歪みを生み出し、遂には取り  
返しのつかない最悪の状況に陥ってしまうのです。

「……迷惑とか、邪魔とか、あなた達はどうして自分達の子供達にそんな酷い事が言えるんですか！？ 愛する人との間に授かり、自らのお腹を痛めて産んだ大切な宝物でしょう！？ それをそんな……！」

「別に、好きで産んだ訳じゃないし、できちゃったんだからしょうがねーじゃん？」

「俺も俺も！ 前に付き合ってた女がいきなりガキ連れてきて『お父さんよ』とか言い出しやがってよ、そんなの知らねーっつの！」

「っーかさ、あのおばさん一人で勝手に熱くなって何か語っちゃってるよ？ キモッ！ 超ウケるんですけど……！」

「……ハア……」

私がこんな状況でも何とか必死でお互いの歩み寄りの為に保護者側と対話を重ねてある間、学校側の人間達は全員一言も発する事無く沈黙を保ったままでした。数人の教師はこれ以上物事が大きくなるのが怖いのか下に俯き、校長に至っては無責任にも腕を組んで大あくびをしている始末です。

「……校長」

「……フアアア……」

「校長！」

「……フェツ！ は、はい？」

「学校側のこれからの対策として、先程までの保護者側の要望にどうお答えするおつもりですか？　どうかこの場でこの学校が生まれ変わる為の新たな教育方針と環境改善の具体策案を皆さんに説明して下さい！」

「うーん、まあそうだねー、どうしようかねー？」

「……校長？」

「ああ、そうだ、あなた中央教育なんたら役員さんなんだっけ？　結構な美人さんだし、だったら全部あなたにこの学校の事を一任しますよ」

「……はあ？」

「えっ？　だって、何とかしてくれる為にあなたがここに来てくれたんじゃないのかい？　私はここで座って見てるだけでいいと聞いとるけどね？　おーい担当、違うのか？　対策ってのは私達がいち考えなきゃいけないのか？」

「……そんな、そこまで腐敗してるなんて……」

「しかしあなた、見れば見るほどスーツ姿が良く似合ういい女だねー？　結婚はしてるのかい？　お子さんはいるのかい？　旦那にはちゃんと満足出来てるのかい？　エヘヘ」

「……………」



それでも、学校側に少しでもこれらの苦情に対して問題を解消しようとする行動や対策があれば何とか改善する事は出来たでしょうが、残念ながらこの学校にはその様な動きは全くと言ってありませんでした。学校そのものが教育現場として完全に『死に態』として化してしまっていたのです。

「うちの子が他の生徒に向かって椅子を投げたって言うてるけど、そんなの子供が持ち上げられるほど軽い椅子なんか使ってるから悪いんじゃない！？ 家庭でストレスが溜まっていた反動とか勝手に理由つけて、何でもかんでもこっちのせいにしてないで貰えます！？」

「うちの子は算数のテストで八十点以上取ったのに、何で通信簿の成績が悪くなっているんだ！？ 授業態度が悪いくらいで成績を落とすなんておかしい話だろ！？ 塾でしっかり勉強しているんだから、学校の授業くらい友達と喋ろうと立ち歩いたりしようと自由だろうが！？ 担任は金でも貰って生徒を差別してるのか！？」

「給食にお米なんか出さないで下さい！ 我が家では娘を外国人に育てたくて英会話教育に通わせているんです！ だから三食全てパン食って決めているんですから、余計な真似しないで下さい！！ こんな事じゃ給食費なんてとても払えません！！」

「うちの子は特等クラスで個別授業を受けさせてくれって言うてるザマスのに、他のレベルの低い子供達と一緒にクラスにしないで戴けないザマスか！？ うちの子は将来政治家になって国を動かす要人になる人材ザマスのよ！？ もっと有能な教師を集めなさいザマス！！」

「あの子が引き籠もりになってパソコンに夢中になったのは、全部パソコン授業なんてものを始めた学校のせいよ！ だから、責任取って家まで車で迎えに来て部屋から引きずり出してよ！ ちなみにタクシーなんて呼んでもこっちは一銭も料金払わないわよ！！」

……もう、こうなってしまうてはどうする事も出来ません。学校に通う生徒の親全員が完全にクレームの怪物と化してしまっていました。それはまるで、伝染した人達が次々とゾンビ化して襲いかかってくるホラー映画のワンシーンの様でした。

「部外者なんかには用は無い！ 今すぐここから出てけ！！」

「そつだ！ お前なんか誰も呼んでない！ さっさと出てけー！！」

「出てけー！！ 出てけー！！」

「……もう、この学校はダメ……」

私が唯一出来る事はこの絶望的な状況を中央教育審議会に報告して、議会の決定に基づき抜本的な学校内の環境改変を施す事ぐらいしか方法がありません。つまりそれは、最悪の場合にはこの学校の閉鎖、教育機関としての資格を剥奪するという絶望の結末を迎える可能性があるという事です。

今現在、他にも全国にはこの学校のように崩壊寸前に追い詰められている教育現場がたくさんあります。実際に文部科学省や県教育審議会が直々に手を下さざるを得なかったケースもあつたそうです。し

かし、私達はこの様なやり方でしか日本の教育界を救う事が出来ないのでしょうか？

私は夫、松本新作に出会って改めて人生の素晴らしさ、世界の広さ、そして教育の大切さを知る事が出来ました。その感動を少しでもたくさんの人と分かち合いたくて、著書執筆や援助活動などに全ての精力を振り絞り頑張ってきました。しかし、最近わからいんです。私の歩む道はこれで正しいのかどうか。このような悲痛な光景を見る度に、自分の自信が失われていく気がするんです……。

「……やっぱり私みたいな人間ごときが未来の子供達の為に何かしてあげられるなんて、到底無理な話だったのかな、新作くん……？」

このまま、日本の教育の現場は滅亡の末路に向かって進んで行くのでしょうか？ 日本の子供達の未来に果たして光の一筋は差し込んで来るのでしょうか？ そんな憂鬱な気分胸を締め付けられていました。

その時です、私は突然何やら妙な胸騒ぎと冷たい何かが背筋を走る感覚を覚えたのです。

「……何？ これってまさか、あの時と同じ……？」

「……松本さん、どうされました？ 顔色が宜しくないみたいです。がご気分でも悪くなされましたか？」

昨日の講演会場から案内役をして下さっている学校の担当者が、私

の顔を覗き込み心配そうな顔をしていました。それほどその時の私の様子は尋常に見えたのでしょう。しかし、この胸騒ぎは決して急病でもストレスによるものでもありません。私は以前にも、言葉では表し様のないこの不思議な胸騒ぎを感じた覚えがあったのです。

「……私の、他には……？」

「……はあ？」

「……私の他に、誰かをここに呼んでいたりしていませんか！？  
誰か他に、顧問として部外者を……！？」

「あつ、は、はい！ 念には念をと思ひまして、知り合いを通じて近年設立された有名中高一貫学校の出資者の一人である実業家の方を紹介して貰ひまして……」

「……実業家？」

「はい、女性の方でファッションデザイナーとして大成功を収めた方と聞いております、そしてその方から偶然にもこの連休中に海外から日本に帰国してくる大物女性著名人がいらつしやると聞き、是非ともご一緒にこちらの相談会の顧問を依頼したのですが、少し到着が遅れると連絡がありました……」

「……あの、まさか、その女性デザイナーって、三島……？」

「あつ、はい、そうです！ 三島千春さんと仰られてました！ 松本さんもお存知でしたか！？ どうも三島さんの言う著名人というのは、当人の昔からのご親友らしくて……」

「……ご親友？ まさか、まさか……？」

「……松本さん？」

「……この感覚、あの人が、あの人がここに……」

「……あ、あの、松本さ……」

「どうしてそんな大切な事を事前に報告してくれなかったんですか！？」

「……は、はい！？」

その時、暴徒と化した保護者達が喚き立つ体育館の入り口の扉がガラガラと音を立てて開き、外から長く綺麗な髪をかきあげながら派手過ぎる真っ赤なレザージャケットと胸の谷間がパツクリと開いた大胆へそ出し黒シャツ、ピッチピチフィットのローライズジーンズに身を包んだ場違いな女性が姿を現した。

「あゝんもう、あつちこつちホコリ臭くってイヤイヤ！ 何かもう会場内もギスギスした雰囲気です超 Bat Feeling！？」  
地方の学校ってこんなボロボロの時代遅れなダサイデザインしてるのね、もう Non sense！ 最っ低！ お化け屋敷みたい！ こんなんじゃないとでも子供達のやる気向上は見込めないわよね！？」

「ちょ、ちよつとねえねえ！？ もしかしてあの人って、あの三島

千春じゃない!？」

「嘘っ!？ あの『ミシマ』ブランドの三島千春!？ マジでえ!？  
何で、何でこんな所にいるの!？」

ファッションにうるさいヤンママ世代や本人と年齢の近いアラフォー世代の女性達は、突然のファッション界のカリスマの登場にさっきまでの憤慨も忘れすっかり憧れの眼差しで一点凝視。数人いる男性陣も完全に鼻の下が伸びきり骨抜きになっていました。私も千春と会うのはお互いの娘達の高校の入学式以来でした。

「いやゝん、痛いほどの視線が集中しているのをビンビン感じるわゝ! どう、綺麗でしょ？ 素敵でしょ？ セクシーでしょ？ みんな、もつと見て見てゝ!？」

「……ねえ、千春？ とりあえずここは学校だから、あまり場違いな行動は自粛してくれるかな……?」

「あつれゝ、美香？ 美香じゃゝん!？ うっそゝ、これって超偶然!？ もしかして教育審議会のお仕事でここに来たの? お疲れちゃゝん!」

「……お、お疲れちゃゝん……」

正直この時、千春に手を振る私の顔はかなり引きつった愛想笑いをしていただろうと思います。今の今までとりあえずは教育の第一人者として熱弁を奮っていた今までの努力が、一瞬の内に彼女にその

場を奪われてしまった訳ですからね。いい気分ではありません。悔しいと言っより、ちよつと不甲斐ない自分が惨めになりました。

しかし、それよりも私が気になって仕方なかったのは、千春が連れにくると言つた海外からの帰国者の存在。そしてその人物の存在こそが私の胸騒ぎの原因。千春の昔からの友人と言つたら、頭の脳裏に浮かぶ人物像はあの『氷の女王』以外に有り得なかったのです。

「……担当さん、あなたつて人は……」

「えっ？ 何かマズい事でもしましたか！？ 私、何か松本さんの顔に泥を塗る様な事でも！」

「……あなたは、とんでもない人物をここに呼び寄せてしまったんです、ここにいるモンスターペアレント達よりも何百倍も驚異的な、世界中の要人達すらも震え上がらせる本物の『怪物』、いや、『神』にも近い存在がここに降臨してしまつたんです……」

「……本物の、怪物？ 神の、降臨……？」

その会話の直後、あれだけ熱く騒ぎ立てていた会場全体は一気に氷点下になったみたいに強烈な寒気に包まれ、その空気を感知取った保護者始め学校関係者の人間達は凍りづけにされた様に固まり静まり返ってしまいました。

「……千春、前座はそれまでで結構よ、アンタは下がって静かにしてなさい」

「Yes！　じゃあ、後はお任せしちゃうよ〜ん！」

その人物は千春の後から静かに体育館の入り口から会場内に入ってくると、旅行用の大きなアタッシューケース二つを入り口付近に立て掛け、コツコツを震え上がりそうな冷たい足音を立ててこちらに向かって歩いて来ました。

必要以上に着飾らないスタイルはあの当時のまま。薄い化粧にトレードマークの真つ白な仕事着用の白衣、黒いフィットスカートにローヒールのレディースューズ、そして片手には門外不出の謎の黒いノートファイル（それをデスノートと呼ぶ人もいます）。

会場全員の視線は千春からその女性に移り、何かとその一挙一動に釘付けとなっていました。それは私とて例外ではありません。群衆の中央を堂々と通って進むその姿は、正に『女王』の名称に相応しい圧倒的な存在感でした。

「……ああ、そうそう、千春？　荷物の見張り役も忘れちゃ駄目よ、しっかりよろしくね」

「Don't worry！　Leave it to me！」

「もし盗まれたりなんてしたら全額弁償して貰うから覚悟しなさい？　勿論、慰謝料もきっちり込み込みでね」

「Oh, my god！　ふえ〜ん、怖いよ〜！？　絶対に盗まれないように頑張って見張りま〜す！」



あの三島千春でさえも軽く手懐け雑用扱いさせる絶対的存在。私は良く知っていました。この人の怖さを。この人の偉大さを。そして、私の脳裏にあの時の記憶が蘇ります。この人の口から発せられたたった一つの言葉により、世界中の人々の人生観と価値観が丸ごと塗り変えられてしまったあの日の記憶が……。

「……あ、あの、保護者の皆様、ご紹介致します、今回の相談会の特別顧問として松本さんと共に我々学校側がご招待致しました……」

彼女はすれ違い様に震え上がる私の姿を確認すると一瞬ニコツと笑いかけてくれました。しかし、刹那に再び冷たく険しい表情に戻る。と担当者からマイクを取り上げ、一片の迷いも無く講壇に上がり眼下の群集に対して静かに語り始めたのです。

「……渡瀬麗奈です、どうぞよろしく」

正に嵐の前の静けさでした。まさかこの数分後、日本のこの茨城県の一つの小さな小学校の体育館から世界中に向けて、ホモ・サピエンス誕生から十五万年続く全人類の歴史とその歩みを紐解き、我々に人間の概念と意義を説く驚愕なメッセージを含んだ『世紀の大舞台』が彼女の手によって再び繰り広げられる事になるうとは、一体神以外に誰が想像出来ていたでしょうか……。

## レクイエム　～怒りの日～

『氷の女王』の突然の登場に硬直してしまった私の前を素通りし、何食わぬ顔で飄々と講壇に上がってしまった彼女。私が自我を取り戻し事の重大さに気づいた時にはもう時すでに遅し、初対面の人々を目上から見下ろすというその恐れ知らずなふてぶてしい態度に、会場の保護者達からは彼女に対しての苦情の罵声が一斉に上がり出しました。

「何だあの女は！？ 相談会の開始時刻に遅刻してやって来たにも拘わらず、ろくな挨拶も謝罪も無しにいきなり講壇上から私達保護者を見下ろすなど失礼にも程があるぞ！！」

「何よあれ、何様のつもりなの！？ どこからの関連でやって来た者なのかは知らないけど、こんな常識外れの人間を特別顧問として招待するなんて、学校側は一体全体何を考えているのよ！？」

「学校と保護者は平等の立場だなんて言ったださっきまでの話はどこへ行ったんだ！？ あの女の態度は完全に矛盾してるじゃないか！？ やっぱり、お前達教育員は我々保護者や生徒達を馬鹿にして見下しているんだな！？」

「何アイツ、すっごいムカつく！ 超ウザいんですけど！？ 早くあの女を下に降ろせよ！ メチャクチャ不愉快！ 最悪！」

教育とは、子供達が自分以外の他の存在と積極的なコミュニケーションを図れる一人の文化人として成長する為に、世間の常識と礼儀を教わり差別や偏見を改め他を慈しむ事を学ぶ道德の場でもありません。その一つの象徴として、教育者と保護者は同じ目線の高さから子供達を見守る存在として、お互いが平等の立場でならなくてははいけません。それは、私がこの役職に就いた時から心に決めた、私の教育概念の支柱となる一つのモットーだったので……。

「……れ、麗奈さん、それはダメです！ その様な高圧的な態度で意見交換の場に望んでしまったら、交流どころか相手側から一方的に反感を買っただけ……！？」

しかし、彼女の辞書に『温和かつ円滑な意見交換』などと言うそんな温く生易しい思想なんて存在すらしていなかったのです。会場から次々と挙がる罵倒に対して、当人は顔色一つ変えずに全く講壇から降りようとする気配を見せません。それを見て焦った私は急いで彼女に駆け寄ろうとしたのですが、彼女はスツと片手をこちらにかざし私の動きを制止したのです。

「……心配御無用、最初から意見交換なんて高度な文化を備えた相手だとは思ってないわ、そんな事はやるだけ無駄よ」

「……えっ？ む、無駄……！？」

彼女は静かにそう言うと、かざした手を下ろし静かに両手を目の前にある演説用の机の上に添えました。凜と身構え前方に鋭い視線を

走らせるその姿からは、満ち溢れるほどの揺るぎない自信と未恐ろしいほどの冷静さをまとったオーラを放ち、その気迫に圧倒された私の足はガタガタと震え出し金縛りにあつた様にそこからピクリとも動かなくなってしまったのです。

「この手の無能な連中にあれだこれだの説法を説いてやっても所詮は馬の耳、私は無意味な事に無駄な労力と時間を費やすのは嫌いな、根本的な思考の改良が必要なのは学校や教育者より寧ろこのやかましい家畜どもの方ね」

「……ちょ、ちょっと麗奈さん！ 何て酷い暴言を……！？」

この発言は一つ漏らさずマイクを通じてスピーカーから会場中に響き渡り、しっかりと会場中の人間の耳に伝わってしまった。勿論、失礼な態度に加えて更には家畜呼ばわりまでされた保護者達は怒髪衝天し、彼らは怒号を上げながら彼女のいる壇上の真下まで一塊になつて一気に詰め寄ってきました。あわよくば今にも壇上に上がり、彼女に対して掴みかかりそうになっている男性の姿すらも確認出来ました。

「オイ、てめえ！ さっきから聞いてりや散々人様をコケにしやがつてよお！ てめえに家畜呼ばわりされる覚えなんて一つもねえんだよ！ 女だからって何言っても許されるなんて思うなよ！？ こっち降りてこいよ、ぶっ殺してやる！！」

「アンタ、私達を誰だと思つてんの！？ 私達はこの学校に学費を払つてあげている保護者、利用者！ アンタ達に利益を与えて生活

を支えている天下のお客様なのよ！？　その神様の存在である私達向かって何よその暴言と偉そうな態度！　今すぐ発言を撤回して謝りなさい！　土下座しなさい！　私達全員一人一人に対して床に頭を擦りつけて許しを請いなさいよ！！」

「人を侮辱する事しか出来ないお前の方がよっぽど無能な家畜だろうが！　こんな礼儀知らずの危険な人物が、子供達の通う教育の場に足を踏み入れるなど言語道断だ！　今すぐ我々の前から消え失せろ！　帰れ帰れ！！」

「そうだそうだー！　ババアに用なんかねえんだよ！　荷物まとめてさっさとかーえーれ！！」

「かーえーれ！！　かーえーれ！！」

「……み、皆さん、どうか落ち着いて下さい！　皆さん……！！」

会場の保護者達は異様な空気の連鎖で一丸となり、集団作用によって完全に理性を失い怒りの暴徒と化してしまいました。大音量の『帰れコール』が室内一体を支配してこちらの制止の声など全て綺麗にかき消されてしまします。もう、とても相談会などと言う常識人同士の話し合いが交わせる状態などはありません。激昂の天津波になった保護者達は、私がいる学校側の人間達が陣取っているすぐ間近にまで迫ってきました。様々な修羅場を経験してきた私ですらも、この時ばかりは恐怖に駆られ自分の身に不安を感じてしまったほどでした。

「……言いたい事は、それだけか……？」

「……!?!」

その時でした。私の耳にうつすらと、そして確かに会場中から湧き上がる怒号に紛れてマイク越しの彼女の声が聞こえてきたのです。それは、これからここで行われる驚愕の舞台の幕を開ける始まりへの序曲、嵐の前触れを知らせる合図だったのです。

そして遂に、神々の怒りは表現化され私達の前にその姿を現したのです。我ら愚かな人間達の奢りと愚行を裁く一筋の鉄槌の雷が、彼女の手によりこの地上に振り落とされたのです。

「いい加減に目を醒まさなか!! このクソ虫どもめがあ!!!!!!」

「ひひひひひ!?!」

体育館内全てのスピーカーを破壊しかねない突然の彼女の怒りの一喝に、会場中を占拠する罵倒の嵐は一瞬にしてかき消し飛ばされてしまいました。顔色を変えて一変に静まり返ってしまった保護者、そして私を含めた教育者、会場にいる一同が彼女の放ったその言葉に自らの耳を疑ったのです。

「……ク、クソ、虫

……?」

無能、家畜、それらを遙かに上回る強烈過ぎる下品な名称を名づけられた我々は、一体今何が目の前で起こったのか理解に苦しみその場に立ち竦み、ただ壇上にいる彼女の姿を茫然と見上げる事しか出来ませんでした。これほどの侮辱的な言葉に対して即座に反応出来なくなるほど、この時の彼女の気迫は鬼神の権化の様な恐ろしいものだったのです。

「あら、言えばちゃんと静かに出来るのね？　それでいいわ、そのまま聞きなさい」

そして、彼女主演の壮大なる歌劇の前奏曲が、彼女自身が振るうタクトに指揮され奏でられていったのです。私達は彼女の彼女による全世界の人類へと向けた『無差別大量人生理念大改造』の舞台の観客の一員となり、それを目の当たりにする事なっただのです。

「クソ虫である貴様らにわざわざ言葉を選び説得を重ねたところで全ては無駄な努力、だからこそ敢えて貴様らでもわかる言葉で教えてやろう！　社会に寄生し反吐を撒き散らし腐敗させ、何一つその生存価値も存在意義も持たない愚かな害虫どもよ！　貴様ら如きの下等生物が我が物顔で寄つてたかつて要望だの苦情だのサービスだの、偉そうな馴れ馴れしい口を叩くな！　恥を知れ、この俗物！」

「……が、害虫！？　俗物！？」

「己の醜い姿すらも自分でわからんのか？　そうだ、貴様らはこの世界に巣くい私欲を貪り、秩序を乱し人類史を混沌の渦へと陥れる存在、害虫以外の何物でもない！　いや、例え害虫とでも屍はいず

れ地上に還り次世代への肥やしぐらいの役には立とうが、貴様らにはその役目すらも務まらない生産性ゼロのゴミクズの集まり、害虫以下の存在、クソ虫だ!!」

「……!？」

「故に、貴様ら不要物と成り下がったクソ虫に権利や理想などを求める資格など一切無い! 身の程を弁えるのは貴様らの方だ、この俗物どもめが!!」

彼女の奏でる大音量オーケストラの前に学校側の関係者達は全員顔を真っ青にして凍り付き、中には頭を抱えて絶望する者もいました。本来ならこんな大それた暴言を公の場でする事など、どんな特別な立場にある人間だとしても許されるはずがありません。しかし、徹底的に侮辱された保護者達は怒り出すどころか未だに茫然と立ち尽くしたままでした。なぜなら、彼らは自分達よりも段違いの、想像を絶する凄まじいオーラを放つ彼女の怒涛の迫力に圧倒され、身動きすら取れなくなってしまっていたのです。

「良く聞けクソ虫ども! 貴様らは自らの誤った選択により人道から外れ、クソ虫の道へと転落していった事になぜ気づかん!? 短絡的な感情と欲望に身を任せ人間としての理性を見失い、本来持っていないなければならない人類の本能のかけらすらも無くしたのだ! 暗黒の奈落の底へと落ちぶれた愚かな下僕どもよ、鏡に写る腐った己の姿を見るがいい! 互いに隣にいる哀れな低脳どもの姿を見るがいい! 己の欲望を制御出来ずに騒ぎ立て、それが叶わないと知るや更に激昂し周囲の迷惑も省みず強引に事を押し進める、これが高度な知能を持つ人類のあるべき姿だと思うか!? これが地球上



全生物の中で唯一道徳を司る人間の本来あるべき姿だと思うのか！  
」

「……自ら、人道から外れた……？」

「自らの欲望だけを理想への最優先として生きるだけなら、そんな事は猿でも犬でも、微小な単細胞生物ですらも出来る事だ！ 思い出せ、我々は何者だ！？ 我々は進化の頂点である霊長類の更に頂点の、生物の歴史において唯一この世界に社会文化と創作技術を発展させ繁栄を続けてきた地球上の支配者、人類なのだぞ！ その我々人類が今の貴様らの様に人類たる自覚と理性を失った時、一体世界には何が生まれた！？ 何を生み出した！？ 平和か！？ 安泰か！？ それとも新たな進化へと導く光の一筋か！？」

「……えっ、いや、あの、それは……？」

「否！！ それは全て断じて違う！！ それにより生まれるのは世界を混沌の渦へと陥れる暗黒の闇！！ 今、貴様らがやっている横暴極まりない言動の数々はいずれ社会の秩序に亀裂を生じ、世界中に大きな歪みを生み出しその代償は必ず我々の元に災いの豪雨として降りかかってくる！ それは、これまでの人間が歩んできた歴史、人類史によって全てが証明されているのだ！！」

彼女の演説はこの国の教育のあり方とかそれに関わる関係者達の心構えとかそんな小さなレベルではない、私達の範疇を軽く凌駕した壮大なスケールの内容でした。

それは我々人間が各個人それぞれに持つ人生観や価値観、そしてこの先の新時代を生きる全人類に対し大いなる警鐘を促す重大なメッセージ。

この時、熱弁を奮う彼女の佇まいは歴史上の名だたる政治家や指導者達を彷彿とさせる、聞く者達に一部の隙も与えない壮絶なものでした。

「よいか、人類の進化、繁栄の歴史とは、生まれながら天より授けられた高度な知能により手にした知識と技術で創造された文明の歴史そのものである！ 文明はそれまで各地を転々と放浪するだけであった人類の生活に平和と安定をもたらし、そこに集まった人々はお互いの共存と文明の繁栄と安泰の為に道徳と戒律を定め秩序を守る事により『国』と言うカテゴリーを誕生させたのだ！ そして、人々は更なる文明の発展と平和の継続を願い、次世代を担う子孫達に『教育』と言う知識教養継承の場を与えたのだ！ 文明により誕生した国と、そこから生まれた一つの文化である教育の場があったからこそ、この時代まで人類は絶滅する事なく全世界にこれだけの繁栄を続けてこれたのだ！ 教育、それこそはこの地球上の生物で我々人類のみが持つ高度文明の象徴！ 人間として生きていく上で絶対に受けなければならぬ最大の義務であり、人間ならば誰もが受ける事の出来る最高の権利なのである！」

太古の昔の時代にまで遡り『教育』と言う文化の偉大さを説明する彼女の言葉の前に、保護者達だけではなく学校側の関係者達、あの適当な発言ばかり並べていた無責任な校長ですらも放心状態となっていました。会場内はいつの間にか完全に彼女が繰り広げる圧倒的な世界観に支配されてしまったのです。

「人類は文明により国を造り上げ、国は人間の理性に基づいた常識と道徳により戒律と秩序を定め、戒律と秩序により生活の安泰と平

和は保たれ、その安泰と平和の継続の為に造られた教育の場によって先駆者から知識と文化が次世代の子供達に継承されていく！　こうして人類は祖先誕生から約一万五千年の時間をかけ文明の進化と人口の繁栄を続け、今現在ここに我々の生命と近代化を遂げたこの世界が存在するのだ！　だが、しかし……」

それまで両手を広げ虚空を見上げたまま演説を続けていた彼女は何かを憐れむ様に下に俯くと、突然会場の保護者達に対し憤怒の表情でカッと目を見開き、握り締めた両拳を演説台に振り落として思い切りドスンと叩いたのです。

その瞬間、言葉では説明出来ない何か強烈な波動がビリビリと彼女を中心に周囲に広がり、会場内の緊張はピークに達しました。私は体感温度が一気に絶対零度まで下降したみたいな錯覚を感じ、校長に至っては恐怖のあまりか座っていた椅子から転げ落ちてしまう有り様でした。

「さっきの貴様らの醜態は一体何事だ！？　怒りと欲望に支配され、人間としての理性や抑止力すらも忘れ外道極まりない傍若無人な言動の数々！　一人が事を荒げれば易々とそれに便乗し、至高な思想と理念を育む教養の場にもズカズカと土足で踏み入り、若き有望な未来の担い手達の才能の樹が芽生える事すらも出来ない不毛の荒野へと変えてしまふ！　しかもそれだけでは飽き足らず、それらの愚行をまるで当然の様に振る舞い悪態を吐くこの哀れな有り様！　貴様らはこれで本当に我々の祖先が残してくれた貴重な文化や豊富な知識を自分の子供達へと継承する指導者に、未来の人類を更なる繁栄へと導く歴史の道標になる事が出来るとでも思っているのか！？　これらの行為が己の血を分けた大切な子供達にしてやれる最大の愛情表現だと思っているのか！？　勘違いも甚だしい！　貴

様らは自らの手で教育の場の秩序の乱し、子供達の無限の可能性を奪ってしまっている事を重々自覚せよ！ 己自身はおるかその子供達の人生までも奈落の底へと墮落させ、世の中を混乱させ暗黒の闇へと陥れる諸悪の根源である貴様らクソ虫どもに保護者を名乗る資格など一切無い！」

彼女のこの言葉に対して、『自分勝手？ そんな事は世界中で誰もがみんなやっているじゃないか？』と反論したい人達はたくさんいらつしやるでしょう。正直者は馬鹿を見る、いつの世もそんな嘆きが叫ばれているのは事実です。

しかし、人間達による自分勝手な行動の数々は次第に一つの巨大な悪意の塊へと増幅し、いつしかそれは世界中に黒い連鎖を起こして秩序のバランスは崩壊への道へと辿り、そして人類は大きな代償を払わなくてはなくなる愚かな過ちを繰り返して犯してきてしまったのです。

この警告はどんな物的証拠や難解な参考書などよりも、私達が学校で学んだこれまでの人類の歴史が全てを証明し、その悲劇を物語っていたのです。彼女の演説は更に人間の本能の奥底を深くえぐっていきます。

「自我を司る理性と道徳心を見失い、教養と良識の追求を怠り、私欲に走り身も心も悪意に支配されてしまった過去の人間達の末路を見るがいい！ 秩序が乱れ集合体としての統一を無くした歴史名高い大国のほとんどの最後は暗黒の時代へと突入し、国民の生活の安定は経済難と食糧難でいとも簡単に崩壊し、それにより国内には犯罪と不満が増加して国勢は一気に衰退して人々は露頭に迷い更なる混乱を呼び起こす！ それでも過ちに気づかない愚かな人間達は生存の為になりふり構わずその手から書物を投げ捨て武器を取り、他

の国への侵略と横領を開始し同じ人類同士でなりより尊い存在であるはずの互いの命を奪い合ったのだ！ その争いは真つ赤な血が地上を覆い尽くすまで果てしなく続き、華やかな繁栄を極めた無数の大国は滅亡し歴史の闇に葬られてきた！ その全ての始まりは『自分だけなら』と言う人間の身勝手な言動から生まれた僅かなバランズの歪み、それは刹那に修復不可能な亀裂となつて各国を巻き込み世界中へと広がっていく！ 悪しき邪念は甘えと油断から出来た心の隙間へと入り込み人から人に次々と感染し、それまで世界に平和と安泰をもたしてきた文明の進化はいつしか自らや地球そのものを滅ぼしかねない人工有害物質や恐ろしい大量殺戮兵器をこの世に生み出してしまったのだ！ この先、もし我々が過去の人間達のように同じ愚かな過ちを犯してしまった時こそが、これまで続いた人類史が遂に終焉を迎えてしまう最期の時と覚悟せよ！ 我々は今こそ先駆者達が経験から得て残してきた知識と教養を改めて再学習し、今一度本来あるべき人間の理想像と地球上の他の生物や自然との共存の道を追求しなければならないのだ！」

### 人類滅亡の時。

予言者を名乗り悪戯に世間を不安に陥れる不可思議な発言や著書を発表する人物はこれまでも世界中にたくさんいましたが、彼女の言葉には彼らのものとは違う重みと凄み、そして過去の人類が実際に体験きた『戦争』と言う名の悲劇の歴史の物証に裏打ちされた強烈な説得力がありました。宗教対立により起こってしまった武力衝突の現場をこの目にした過去を持つ私には、あまりにリアルで身の毛のよだつ恐怖の警告でした。

「事実、一部の人間達の私欲のみを求めた行動により世の秩序のバ

ランスは次第に乱れ歪みが生じ、その綻びが慢性的な世界全体の金融不安や先進国ですらも無視出来なくなった食料難問題を起こし目に見える形として表面化されてきている！そこに石油等のエネルギー問題や発展途上国との格差問題が重なり現在の国際状況は悪化の一途を辿っている！その綻びはこの日本の教育の場においても悪影響を及ぼし、この学校と同様に全国の教育機関は本来の存在意義や尊厳を失いつつある！日本の教育がここまで崩壊寸前に迫いやられたのは各教育機関に属する教師や生徒達の保護者、そしてこの国の全ての教育に携わる関係者達の醜い慢心と浅はかな見通しに原因があるのだ！各自それぞれが良識と道徳を司る選ばれた教育者としての、次世代を担う子供達に自らが学び経験した知識や教養を継承する指導者としての責任と自覚を再確認せよ！教育において最も大切なステータスは学歴でも成績でも点数でも無い、人間一人としての精神と人格の完成度である！自我を制御し社会の秩序を守り、他の存在を認識し互いに共存し合う事によって初めて世界全体のバランスは保たれ、平和と安泰の時代がやって来るのだ！

彼女の口から発せられるその言葉一つ一つには、太古の昔に神が私達人類に定め授けた戒律の一文をも彷彿とさせる神秘的な重厚感に満ち溢れていました。

各派宗教学に精通し数ある聖書を熟読した私ですらも完全に圧巻されてしまい、自らの論理を勇敢な態度で展開する彼女の姿は私の目にとっても力強く、そして美しく映り、まるで神により遣わされ地上に降り立った新世界の預言者の様でした。

それは私自身が以前から彼女の生き様に憧れ尊敬している人間の一つだったからという事もありましたが、それくらいこの時の彼女の姿は眩く輝いて見えたのです。

「この世界は各地で隣接する、或いは国交を契ったそれぞれ国々が平安と秩序を守り、一つの集合体としての微妙なバランスを維持している事を決して忘れてはならない！　どこか一つが身勝手な行動を起こせば保たれていたバランスは脆くも崩れ、そこから生じた歪みは我々の脅威と化し、平和の時代は確実に終焉を迎え世界は混沌の渦へと呑み込まれてしまうだろう！　各個人一人一人の思考や行動がどれだけ周囲に対し重大な影響を及ぼすか、我々人類はいよいよ思い知らなければならぬ！　過去の教訓に習い同じ愚かな過ちを繰り返さない為に！　先駆者達が祈り託しやつと手にしたこの平和と安泰を次世代にも継承し、未来永劫まで人類の繁栄を願う為にも！　各自が今一度、人間としてあるべき理想の姿を取り戻さなければいけない時代がやって来たのだ！！」

そして、私がこれまで人生の中で一番強烈な感銘を受けたあの『箴言』が彼女の口から発せられたのです。私がこれまでに学習し蓄えてきた知識や教養、それにより完成されたはずの人生概念すらも全て塗り替えてしまった、あの言葉が……。

「国も政治も教育も、経済も物流も生活も、どんなに近代化が進もうと全ては人が動かし人が支えているのだ！　それ故に、国家レベルにおける急速な人材の育成強化と個人一人一人の徹底的な思想改善の努力が今現在の国際社会に必要不可欠なのだ！！」

「……思想、改善？　それは一体、何？　教えて、私達はこれから時代をどうやって生きていけばいいの……？」

私の問いかけに応える様に彼女がスツと右手を掲げ天井を指差した時、偶然か或いは必然だったのか、外からの暮れかかった夕日の明かりの帯が窓から彼女に差し込み、その姿を煌々と照らしました。それはまるで後光が差した様に眩く光り輝き、私は目の前で繰り広げられている光景が果たして現実なのか夢なのか、はつきりと判断出来なくなるほど感情が高揚してしまいました。

「良く聞け人類達よ！ この世の生を受けた人間は誰もがその生まれてきた役目を全うしなければならないのだ！ 『一個人こそは、一国家』である！！」

「……一個人が、一国家……？」

彼女が主演を務め全ての演出を手がけた驚愕の歌劇の舞台はいよいよ佳境を迎え、迷走する日本の教育の在り方と人間の存在意義の核心に迫る最大の見せ場を迎えます。私を始め、会場内の人間達はすっかりそれを今か今かと待ちわびる観客と化していました。まるで、主に教えを乞う迷える羊達の様に。



## ツアラトウストラはかく語りき

会場全体が魅了されていました。彼女の演説に、彼女の一言一言に。そして、求めていました。彼女の教えを。彼女の答えを。私達人類がこれから訪れる不可測な新時代に対して、どのような姿で、どのような思想で立ち向かえば良いのかを。『一個人こそが一国家』、この言葉が意味するものとは一体何なのかを……。

「一個人こそが一国家、それはその言葉の通り、この世に生を受けた人間誰もがそれぞれ『一つの世界』、『一つの国』を持つ主として常に知識と教養、道徳心と常識力、己自身の存在価値と生産性の向上に勤しみ、自分がこの世界中の平和と安泰のバランスを支える必要不可能な存在である事を、そしてそれにより全ての言動や結果に対して厳しい責任を問われる立場である事を自覚し、その役目を決して放棄したり逃げ出したりせず最後まで全うしなければならな」と言う事である！ 貴様らは一つの事件や問題に対して、それに携わった集合体の長を務める者一人が全ての責任を背負えばいいと誤解していないか！？ それは違う！ 我々は各自それぞれが常に『自分は一国家の主である』と言う重大な心構えで物事に取り組み自らの失態や過ちにより生じた悶着はその本人が全ての責任を取らなくてはならないのだ！ それは人類がこの世に生を受け自由と幸福と豊潤を求め人生を謳歌する権利を与えられた代わりに、生きていく上で決して免れる事の出来ない絶対の義務なのだ！！」

「……絶対の、義務……！！」

「先程にも述べた通り、安泰と平和とはこの世に生きる我々人間一人一人の理性のバランスによって保たれている！ その為、各国家機関や宗教各派はそれぞれが様々な法律や戒律を厳しく定め、人々が煩惱に支配され身勝手な行動を起こし秩序を乱さぬ様に処罰し管理されている！ しかし、それ以前に一個人がそれぞれ理性心と道徳心を重んじ厳しく己自身を管理出来なくては、例えば古代から神が人々に定めたと崇められる神聖な戒めだとしても次第にその威厳や価値観は薄れ、制御力を失った機関は民衆を治め切れずに暴走し、そこから生まれた混乱と歪みにより秩序は乱れ平和は崩壊する！ この地球上に生きる全ての人間が個々に自戒し努めなくては、この世に本当の平和な時代など訪れはしないのだ！！」

人間とはその有り余る豊富な知能と技術を持つが故に自らの様々な欲望を抑えきれず、ついつい『自分だけなら』と心に油断を生じ、己の行動の責任に対して甘さを露呈してしまいがちです。それも人間が天から授かった個性の一部なのかもしれません。

だが、その行動により自分だけではなく家族や友人、その周囲にまでも想定外の悪影響を及ぼし、己の不甲斐なさを憐れみ後悔の念に駆られた経験は誰もが人生の中で一度はしているだろうと思います。それがまだ目に見える形で、迷惑をかける規模が小さいものなら誠意を込めて償えば取り返しが着くかもしれません。

しかし、その責任の自覚が無いままに過ちを繰り返してしまつた場合、本人が気づいた頃には家族や友人どころか社会や国家、あわよくば国際問題にまでも発展してしまう大事件になってしまふ事もあるのです。彼女はその僅かな心の油断こそが世界中を混沌の渦へと引きずり込み暗黒の時代へと誘う全ての諸悪の根源だと言つのです。

「これ以上、人類が私欲を満たすだけの行為に没頭し、ただでさえ希少となりつつある資源はおるか、飽和化した互いの財産や貯蓄を奪い合う様な愚かな争いをし続ければ、この先我々人類、そして地球の未来は無いと思え！ 何度も言うが、これは何も世界の平和を守る為だけの話ではない、この日本の教育界を守る為の話でもあるのだ！ 教育の場が崩壊の危機に曝されているのは政治や時代背景だけのせいではない、それに携わる全ての人間の信念がねじ曲がってきている事こそが全ての原因なのだ！ 取り返しのつかない事態になってしまいう前に、我々は常日頃から自らの言動と態度を第三者の目線から注意深く見つめ、自らの理性と道徳によって厳しく戒めなければならぬのだ！！」

「……自らを戒める……、でも、そんな事が果たして同じ過ちを繰り返してきた私達人間に出来る事なの？ 全世界、全ての人間がそんな事を……？」

「出来る！ 己自身の強さを信じるのだ！ 疑問や不安などをその心に抱く必要など一つも無い！ その強さこそは元来人間全員に備わっている本能である！ そして、そこに祖先が残してきた有り難い知識と教養の象徴である教育の場をしっかりと確立させ、無限の可能性を持つ子供達を一個人一国家の理念でそれぞれ自覚と良識を備えた君主として育成すれば、世界は二度と混沌の渦に呑み込まれる事はないだろう！ だからこそ、教育とは人間が生きていく上で絶対に欠かす事の出来ない要素、人が人として世に認めて貰える様になる為に、環境も貧困も差別無く誰もが受けなければならない最低限の権利であり、必ず受けなければならない最低限の義務なのだ！」

教育は私達人間が生きていく上で絶対に必要不可欠のもの、それは

私も重々に理解していたつもりでした。でも、なぜ？ 教育とは何の為に存在するのか？ 人々が充実したより良い生活を過ごしていく為？ 人間が更なる孤高な存在へと向上する為？ 進化の為？ 神と言う存在に近づく為？

ならば、人々が目指すべき場所とは一体どこなのか？ なぜこれほどまでに人間は学習をし続けなければならないのか？ 私自身、その答えがはっきりと見えていませんでした。しかし彼女は、私が何十年かけてもわからなかったその答えをいとも簡単に、そして誰でもわかる例えとして表してみせたのです。

教育とは世界に平和と安泰をもたらし、それを継続する為に子孫へ生きる術を教え一本の強固な秩序の柱として彼らを育てる大切な場所。そして、自らの血を分け次世代を譲り渡す愛すべき子供達に我々が与えてあげる事の出来る絶大な愛情の象徴だったのです。

こんな当たり前の事に今更気づくだなんて、どうやら私もここに顔を揃える保護者達や力不足の教育者達同様の、ただの無能で愚かなクソ虫だったみたいです。情けない限りです。

「それでも自ら思想に自信が持てない、自分を厳しく戒める事が出来ない、と嘆く気弱な人間達もいるだろう、しかし喜べ、貴様らは幸運にも保護者と言う立場である、つまり、自分以外にもその生き様を厳しい目線で見張ってくれる存在がいると言う事だ」

そして、彼女の話は天から新たな命を授かり、それを育てる義務を背負った『親』と言う存在の本質へと移っていきます。彼女自身も一人の娘を持つ一人の母親、親としてのあるべき姿を語る彼女のその言葉に、彼女の娘と同じ年の娘を持ち彼女と同じ一人の母親である私の心は熱く震えました。

「一個人こそが一国家、それは全世界の人間達に当てはまる事、つまり貴様ら成人した人間達だけの話では無い、その子供達とて、産まれた時から一つの世界を治める一人の当主なのだ！」

「……子供達も？」

「そうだ、誰一人とて例外などいない！　しかし、産まれたばかりの赤子に自らの国家を運営し発展させる力などは皆無に等しい、だからこそ、その国々を発展させ繁栄に導く指導者の存在が必要なのだ！　その指導者こそが、その子供達を世に産み出した親であり、保護者に当てはまるのだ！　親達よ、自覚と自信を持て！　貴様らは一つの国を育て作り上げる事を天より選ばれ任された偉大なる指導者、一つの時代を切り開く創始者なのだ！」

「……創始者……！」

「その子供達が、どのような当主として成長し、自らの『国』と云う存在意義を発展させていくかは全て創始者の思想と概念、その導き一つで繁栄と衰退を決定づけるのだ！　正しき教育を受け良識ある高貴な王と成長した者は人生を成功させ他から名声と尊敬の念を与えられるが、間違った道を導かれ愚かな暴君と化した者は世界中の秩序を乱し、その悪名は世界中に響き渡り末代にまでの笑い者になるだろう！　それらの分岐の運命を握るのは全て子供達に命を与えた貴様ら親達の役目！　だからこそ、親と言う立場である者はその道標となる創始者として常に己自身を厳しく戒めていなければならぬのだ！　よいか、子供達は常に親の姿を見ているぞ！　その姿から人生とは何か、生きる事とは何かを常に学習し吸収している！　家庭内での何気ないやり取りや会話、それこそが何よりも子供達を作り上げる人生の礎となり、彼らの栄枯盛衰を運命づける大切な

教育の場の一つである事を決して忘れてはならない！！」

彼女の言葉を耳にする保護者達の表情から、先程までのあの怒りの形相が次第に消えてされていくのがわかりました。会場を支配していた澱んだ邪念の空気は完全に浄化され、中には茫然と立ち尽くしたままポロポロと涙を流している女性の姿もありました。あの常識知らずの幼いヤンママや不良の父親達でさえも目を輝かせて彼女の姿を見つめていたほどです。

「こんな私にも自らの腹を痛めて産んだ実の娘と大切な人から譲り受けたが義理の娘がいる、正直な話、私は仕事による多忙を理由にして、あまり彼女達に母親らしい事をしてあげられてはいない、彼女達もそう思っているだろう、その証拠に、義理の娘は私達に反抗して間違った道へと歩み出してしまった時もあった」

彼女のかげがえのない存在である二人の娘姉妹。その姉である義理の娘さんは一時的警察のお世話にもなるほど荒れていた事もありました。でも、その娘さんも今や可愛い妹さんや私の娘達までもを見守ってくれる逞しい素敵な女性へと成長したのです。

「しかし、それでも私は諦めずに自らを厳しく戒め、人間としてあるべき姿を彼女達に見せる事によって、一個人一国家の主として彼女達の唯一の創始者としての責任を全うしてきた！ それにより、彼女達は私の理想通りの素晴らしい立派な人間として日々成長してくれている！ それは私にとって何物にも代え難い一番の財産、彼女達は私が正しい人生を歩んできた事を証明してくれる最高の誇り

である！ 子供とは親自身の姿の鏡であり、自らのステータスを誇示する天から授かった最高の名誉の勲章、これまでの人生を生きてきた証、人間の証明なのだ！！」

子供の姿こそが自分自身の姿、そして、自らが歩んできた人生そのものを映し出す真実の鏡、神が私達各夫婦各家庭に遣わせた最高の名誉。私はこの言葉を聞いた時、体の底から熱く迸る『何か』が込み上げ、自然と頬に一筋の涙が伝っていました。

もし、私の娘が私達両親の姿を見て学び一人の人間になったのならば、今の成長した娘の姿を思い浮かべてこんなに嬉しい事は他に無いと思ったからです。私達のこれまで生きてきた人生は決して間違っていないかったのだと……。

「世界、宇宙、銀河系、この世に存在する全てを司り、人類を平和と安泰の時代へと導くのは神や運命などと言う曖昧な存在などでは無い！ 我々、命を与えられた全ての人間自身の一人一人の心備えこそが平和をもたらし、この世界を未知なる新時代へと導くのだ！ 誰一人としてその役目を途中で放棄してはならない！ 誰一人としてその役目を他人から奪い取ってはならない！ 保護者達よ、今こそ親としての、人間としての自覚を身につけ、失った誇りと自信をその手に取り戻せ！ 激痛に耐えてまでこの世に命を誕生させた母としての母性を取り戻せ！ 一家の主として家族を守る父としての威厳を取り戻せ！ 今こそが貴様らがクソ虫から再び人間へと戻る事が出来る最大の機会！ 今からでも遅くはない、自らが犯してしまった過ちを悔い改め、人間としてあるべき姿へと再び成長を始めるのだ！ 人生とは常に学習の連続、この場所は誰もが平等に知識を与え教養の宝庫である学校と言う大切な教育の場である事を忘れてはならない！ 今ここで改めて学んだ良識と高き思想を持って、

堂々とその生き様を子供達に見せて導いてやるがいい！ すれば、お前達の名は一つの大国の君主へと成長した子孫達に、『偉大なる創始者』として未来永劫語り続けられる事だろう！！」

その演説はすでに教育概念や母性愛、家族愛を超え、国、世界と言うカテゴリーを超え、はたまた銀河系にまでも到達する壮大なスケールへと発展していきました。彼女の理念が果たして民主的なのか、それとも社会的なのか、あるいは宗教的なのかは私には良くわかりません。

ただ、彼女の言葉にはそれらを軽く超越するもつと人間の本質の奥底にある『何か』を奮い立たせる力があつた事だけは事実です。この時、私はある映画に登場したワンシーンが脳裏をよぎりました。まだ二本足で直立したばかりの類人猿達の前に、進化へのヒントが刻まれた石板、『モノリス』が宇宙から降りてくるシーンです。この時の彼女の言葉には、このシーンに匹敵するだけの凄まじい圧倒感があつたのです。

「……私が言いたい事は以上です、度々失礼な発言があつた事をお詫びしまして演説を終わらせて戴きます、どうもありがとうございます」

会場内の人々に向かって軽く一礼した彼女は何事もなかった様に講壇の演説台からスタスタと離れ、階段を伝い下に降りていきました。すると、緊張から解放された様に講壇上空に吊されていた校旗はガタンと斜めに傾き、壁に飾られていたこの学校の教育概念が書かれた巨大な額縁が大きな音を立てて下に落ちてしまいました。

幸いな事にそれによる怪我人などは出なかったのですが、そんな突



然のハプニングにも会場にいる全員は全くの無反応。まるで魂を抜かれてしまったみたいに茫然とその場に立ち尽くし、その世紀の大演説の余韻は何十分間か収まる事はありませんでした。

「……ああ、そうそう、校長先生？」

「……は、は、はいっ!？」

何かを思い出した様に足を止めた彼女はクルリときびすを返すと、静かに、そして確実に、腰が抜けてあられもない姿の校長の元へと歩み寄っていきます。その迫力を前にした校長はガタガタと怯え出し、お尻を床に着いたままズルズルと後退りをし始める無様な有り様。それは大蛇に睨まれ怯んでしまった非力な雨蛙の様でした。

「ここに来る前に話この学校が抱える問題について担当者から電話で色々詳しく聞かせて貰ったけど、元の騒動の原因はどうやらあなたの無責任で勝手な学校運営にあったそうね？ 一体この責任、どうやって取るおつもりなのかしら？」

「……い、いや、あの、そ、それは……」

「見苦しいぞ、このクソ虫め!! 潔く非を認め悔い改めるがいい!! 貴様の様な存在が教育者を名乗る事など不届き千万!! 貴様こそが小学校から教育をやり直してくるがいい!! 恥を知れ、この俗物!!」

「は、はいっ! 今すぐ教育委員会に退職届を提出して一から勉

強し直して参りますうう！ 誠に申し訳ございませんでしたああ！  
」

校長は彼女に対して深々と土下座をして平謝りするどころか、どうやら恐怖の余りいい歳にもかかわらず事もあろうか失禁を仕出かしてしまった様で、辺り一面には不快な異臭が立ち込めてきました。もう最悪です。彼が次世代を担う子供達の見本となれる時が果たしてやってくるのか今から不安で仕方ありません。

「……ああ、もう助けて、ごめんなさいごめんなさい、女はコワイ女はコワイ女はコワイ……」

「……ふう、まあわかれば宜しい、もうここに私の役目は無いわね？ じゃあ帰るわよ千春、荷物見張りご苦労様」

「Hiなあゝ！ もうすっかり待ちくたびれちゃったゝ！ 麗奈の姿、いつまで経っても相変わらずVery very cool！ さすがはアタシが宇宙一Respectしちゃう理想の女性像だわ！ もう最っ高！ 超Excellent!!」

「あら、いつまで経っても相変わらず調子の良い事ばかり言ってるのはアンタの方でしょ？ そんなに褒めたって何も出てきやしないわよ？」

「Oops！ Oh, sorry sorry!」

「……全く、いい加減その軽々しい言葉使いは何とかならないの？ 自分の娘にすっかりまで遺伝しちゃってるじゃない？ アンタ達

親子は仕事も家事も全て完璧にこなせるのに、これじゃせつかくの才色兼備が台無しの馬鹿丸出しじゃないのよ？」

「Don't worry, baby! 心配御無用! 言葉使いなんてファッションの一つよっ! 中身がしっかり伴っていればCommunicationの方法はFreedom! アタシにとっても娘の千夏は最高の誇りであってアタシの最高傑作なんだから! 見た目はCuteなCandy girl、でも中身は全てを備え持ったSuper lady! それが三島家親子共通のKey wordなのよっ!」

「……馬鹿馬鹿しくてついていけないわ……」

「えっ!?! どうしてそうやって首傾げるのよお!?! アタシが言ってる事ってそんなにおかしい? ねえ、ちよっとお、何か言つてよお? 置いてかないでよお? ねえ麗奈、麗奈つてば!?!」

依頼された用件が済ませた彼女は慌てる千春を置き去りにしてスツと私の前を通り過ぎ、保護者達が並ぶ列の真ん中の道を着た順に帰るうとしていました。その時つい、私は彼女の事を呼び止めてしまったのです。

「……あ、あの、麗奈さん、渡瀬麗奈さん!」

決して彼女の先程までの言葉に意義を申し立てる為に呼び止めた訳ではありません。もちろん、本来自分がやらなければいけなかった

仕事を取られて嫉妬したからでもありません。なぜ私がこんな行動を起こしたのか、今も自分で良くわからないんです。

自らが心中に抱えている数々の疑問に答えて貰いたかったのか、それともただ単に彼女がこの場から立ち去るのが名残惜しかったのか、ただついつい、体が勝手に反応を起こしてしまったのです。

「……ん？ 何かしら？」

彼女は私の呼びかけに振り向き、こちらに応えてくれました。講壇に上がる寸前に一瞬だけ私に見せてくれたあの優しい笑顔で。壇上で熱弁を奮っていた『氷の女王』の姿はもうそこにはありませんでした。

『私は、以前にもこの光景をこの目で見た記憶がある』

今から十七年も昔のあの日、世界中をその足元に跪かせた彼女が今、私の呼びかけだけに反応してくれている。私の胸騒ぎはいつしか激しい鼓動に変わり、熱い血流が体中を巡り自分が興奮状態に達しているのがわかりました。そして、急き立てる感情を抑えて慎重に言葉を選び、声を振り絞る様に彼女に問いかけたのです。

## 新世界より

「麗奈さん、あなたは、あなたは どうして……？」

今から十七年前、私は当時報道ジャーナリストを生業としていた夫、松本新作のサポートとして、国際問題にまで発展してしまったある不正企業買収事件取材していました。その事件の内容とは、世界の経済界でも五本の指に入り日本を代表する大財閥、奥井グループがモータースポーツ界に参戦している二輪車生産企業や部品生産工場を次々とその絶大な財力により強引に傘下に収めるといったものでした。

しかも、その買収行為に反対し抵抗した企業の社員やチームスタッフ等は労働条件の不遇や大量解雇などの憂き目に合わされ退職者や失業者が相次ぎ、それにより企業や工場も人材不足になり経営不振や資金運営に支障が発生し、車両の開発や部品の生産も追いつかなくなり競技参戦の目処が立たなくなってしまうたのです。

そして遂には国際サイクリズム連盟こと略称『FIM』が主催をするロードレース世界選手権、通称『Moto GP』の開催が極めて困難となり、あわや当時四十年近くの歴史を残していたこの大会そのものが全面廃止され消滅する寸前まで追い込まれてしまったのです。

それまで主に宗教対立や社会問題等で国際紛争に陥った戦場の前線を取材の場として、戦争の愚かさや人命の尊さを『情報』と言う形で世界中の人々に訴え続けてきた夫の新作が、なぜこの様な良くありげな大財閥の強行買収劇程度の騒動に首を突っ込み取材をし始め

たのか、私は当初いまいち理解出来ませんでした。

しかし、この事件の真相を調査し真実を知れば知るほど、私は身の毛のよだつ恐怖心と嘔吐をもよおす様な嫌悪感を覚えました。そこでは私が夫が世の中で最も忌み嫌う人間の蛮行である人権の無視や自由の剥奪などが横暴な力によって平然として行われ、そして悪銭と権力欲にまみれた澱んだ渴望と恐ろしく陰険な私怨が蜷局を巻き牙を剥いていたのです。

この騒動全ての始まりの原因とは、奥井グループの二代目総裁に君臨する奥井幹ノ介氏と、当時ロードレース世界選手権中型排気量クラスの歴代最強王者と呼ばれた渡瀬虎太郎氏との、互いの母親により運命づけられた複雑な出生の秘話と、互いが背負ってきたこれまでの波瀾万丈な人生経緯に関わる一つの遺恨がもたらしたものでした。

一個人同士のものだけであつた怨恨は次第に熾烈を増し、いつしかお互いが身を置く生活や職場、その周囲の人間達をも巻き込む凄惨な集団対立へと発展、拡大していき、遂にはその騒動の中で失望の拳げ句に自ら命を絶つ者や、海外ではその対立が原因と思われる残忍な殺人事件までもが発生してしまつたのです。

騒動の渦中の人々の道徳心と秩序に欠けた数々の行為が問題視され、世界中の経済事業にも悪影響を及ぼし、ただの企業買収騒動では済まなくなつてしまつたこの事件は今現在でも『日本を舞台にした二十世紀最大の大スキャンダル』として世界中の人々の脳裏にその醜名を深く刻み込まれています。

騒動の片方である渡瀬氏と幼少期から生活を共にし兄弟当然の様な深い交流があつた夫は、正論を訴える彼を信頼して援助する為に当時まだ最新鋭だつた様々なIT技術やメディア関係者との友好関係を駆使して情報戦の指揮を執り、世界屈指の情報網を展開する奥井グループに対抗しました。

私も夫の力になる為に自らの身の危険を承知の上でグループ内関係

者との取材の密約を取り、それによって得る事が出来た貴重な情報を元に、この騒動に隠された醜状な真実をまとめた告発本を執筆しました。そして、この本の世に出す為に協力して下さった勇敢な出版社とNGO団体が用意してくれた出版会の会場で、私は奥井グループが行った愚行の数々を改めて公の場に告発し彼らと共に戦ったのです。

私達夫婦を含めた反奥井支持者と被害を受けた各モーターサイクルスポーツ関係者達によるそれらの必死の活動と嘆訴に共感して下さった人々は私達と共に立ち上がり、当初この騒動に対して無関心だった人達まで一丸となって世論は一気に奥井グループ批判の声へと傾いていきました。

そして、国際裁判の場までもつれ込んだこの騒動の決着は、グループ内部からの告発や奥井幹ノ介氏直々に共謀を持ち掛けられた風間貴之氏の勇氣ある証言が決定的な証拠となり、裁判所から正式に『奥井グループの不正買収における商業市場独占禁止法違反』という判決が下され、私達は絶大な財力と権力を振るい悪道の限りを尽くしてきた巨大財閥から完全勝利をこの手に掴み取ったのです。

しかし、それでもまだこの因縁の対決が終焉を迎える事はありませんでした。改めて結束を固め体制を整え始めた奥井グループは、対モーターサイクルスポーツ界への参入計画を企業買収による強行侵略から、資金と開発技術を提供するスポンサー活動へと方向転換をして、奇しくも敵対していた渡瀬氏が所属していた参戦チームとの共同経営の商談を持ちかけてきたのです。

勿論、散々奥井グループによって苦しめられてきた関係者達は誰一人その話に賛同する者はいませんでした。この商談の本当の目的は、奥井氏がグループ内の派閥分裂や自身の権力や地位から失脚するのを恐れて起こした茶番劇。最後の醜い悪あがきだという事はもう誰もがわかりきっていました。

そこで、私達はこの騒動の終焉と奥井氏の失脚、そしてこの忌まわしき因縁を後々の世代まで遺恨として残さぬよう完全なる終止符を打つ為に一世一代の大奇襲に打って出たのです。

それが、今から十七年前の夏至の頃に決行された『民間における国内史上最大のクーデター』と言われた大事件。都内の最高級ホテル内で行われていた奥井グループの株主総会に向けて、私達関係者や共に立ち上がった支持者達が集合し一斉に会場へと押しかけた『一万五千人』による大デモ行進です。

そして、その行進の先頭に立ち私達を率いた人物こそが彼女、当時まだ渡瀬氏と入籍する前の旧姓、滝沢麗奈その人だったのです。

彼女は女性、しかも二十代前半という若さながら渡瀬氏や風間氏が所属していたオフィシャルチームの代表兼開発エンジニアの中核を務め、長年その敏腕を振るってチームを何度も栄光に導いてきた脅威のキャリアウーマン。私が彼女が存在を知り初めて出逢ったのもその時の事でした。

奥井幹ノ介氏と腹違いの妹である伊織さんの実の娘であり一族の血が流れている彼女には、本家の当主である幹ノ介氏と同等のその莫大な財産を相続する権利を所有していました。この話は古くに先代の後妻と正式な後継者であった幹ノ介氏との対立により生まれた奥井家にまつわる遺恨の一つで、例の騒動により経営方針に相違点が見え出し亀裂が起こっていたグループ内では幹ノ介氏から彼女を支持しようとする動きがあったそうです。

そこで、幹ノ介氏は伊織さんとその夫である滝沢氏の遺言を守り奥井家と距離を取っていた彼女に対して、渡瀬氏との完全和解と好条件の契約内容によって財閥の経営首脳陣の一員として改めて一族に迎え入れ、くすぶり出していた派閥分裂の危機回避と自らが持つ経



営権の存続を実現させようと目論んだのです。

しかし、彼女はその場にいた一万五千人のデモ参加者と総会に訪れていた招待株主五百人、そして因縁の相手である幹ノ介氏の目の前で毅然とした態度で惜しみも無くその権利を破棄してみせたのです。その姿と発言は私の夫の情報で会場に詰めかけていた各報道陣により各地にリアルタイムで中継され、全世界の目撃者がその証人となつたのです。

彼女のその勇ましい決意表明により、公然の前で名誉挽回の機会を失い遂に万策尽き果てた幹ノ介氏は還付無きまでに失意のどん底へと叩き落とされ、経営権を首脳陣に委譲して信頼を回復させ奥井グループ名誉会長として再び復帰するまでの十数年の間、華やかな表舞台からその姿を消したのです。事実上の失脚、日本経済を盛況させ牛耳ってきた風雲児の歴史はバブル経済の終焉と共にその最期を迎えたのです。

そして、続けて彼女は会場に詰めかけた人々やテレビ中継の画面も向こう側にいる全地球上の人類に対し、このような惨劇を再び繰り返さない為に、飽食の時代に依存し大切なものを失いつつあった私達に人間としてあるべき姿を取り戻させる為に、高らかと、そして堂々と、確かな理念と熱き意志を持ってこう言い放ったのです。

『頂に立ち人々を牽引する指導者達よ、集団を統治し人々の生活を保護する責任者達よ！ 今こそ己自身の姿を見つめ直し、自我と自覚に目覚める時がやって来たのだ！ 私欲や雑念を切り離し、他を尊重し尊敬し、そして自らも他から必要とされる孤高な存在を目標とせよ！ その志こそが世界を平和と安泰の時代へと導き、今の我々が新たな世代を生きる子供達に与えてあげられる真の愛情なのだ！』

彼女のこの言葉は世界中のメディアや学会の場でも話題の中心となり、各地で秩序に対する概念や人間の本能と理性についての熱い討論が交わされる様になりました。奇しくも、当時の日本経済はバブル崩壊により不況の嵐の真只中。株価暴落より弱体化した日本市場は次々と外資系巨大企業の財力に屈し侵攻され、『経済大国日本』の信頼と権威は地の底へと落ちてしまいう寸前でした。

しかし、彼女のこの言葉をきっかけに財力を武器に株式を大量買収して強引に経営権を奪い取っていく大企業の利益最優先の戦略スタイルに対して世界中で様々な疑問の声が上がり始め、次第に経済界の流れは侵略を目的とした敵対的買収から、苦しむ者達へ救いの手を差し伸べ互いの共存を図る資本提携合併の流れへと変化していったのです。

また、先の未来を絶望視していた日本のビジネスマン達もあの彼女の言葉を聞いて自信を取り戻して立ち上がり、一時期は倒産、破綻寸前だった各企業は不況のどん底から次々と復活を遂げ、日本の経済界は最盛期とまではいかないものの再びその活気を取り戻したのです。

勿論、日本の経済回復は政府の政策や各企業の運営改善、それに携わった人々の努力により達成されたのは確かです。しかし、この時の彼女の一喝と勇ましい佇まいは多くの人に自信と勇気をもたらし、復活を遂げる為のカンフル剤になったのも事実なのです。

平和と安泰を手にした人々は自然にその幸福が永遠に続く事を願います。世界情勢も長年緊迫状態が続いていた東西冷戦が終焉を迎え、人々は対立から共存、互いを支え合い共に生きていく平穏な環境を求めるようになりました。

各国が利益優先で技術を競い合っていた産業開発のあり方に対して、も抜本的な見直しが施され、母なる大地である地球を愛しみ温暖化対策や環境汚染について世界中で積極的な会議が行われるようにな

りました。人々は自分自身の生活、人生を再度見直し、改めて命の大切さを学ぶ様になったのです。

しかし、平穩はいつの世も人の心に怠慢を生み出していまうものでもあります。時代は安泰の時からまたも人々の対立や差別により起こってしまった愚かな争いで混沌の渦に吞まれかけ、今まさに暗黒の時代へと突入しようとしています。

アメリカで起こったあの同時多発テロ事件をきっかけに資本主義国とイスラム教主義国による対立は激化して、今もアジア中東近辺では憎み合う必要の無いはずの人間同士が銃を取り、各地で戦争が繰り広げられ続けています。

毎日の様に何十人も死者が出て、中には未来に無限の可能性が望まれる若い命達までもがその身を犠牲にして自爆テロ行為を行う。

まるで地獄の様な惨状の中で人々は疲労し、苦悩し、銃弾と悲しみの涙の雨は一向に止む気配がありません。

そして、一度起こってしまった争いと過ちは限られた地域だけでは収まらず、世界中に悪の連鎖を引き起こします。一つの歪みはそこを中心にして世界の平和と秩序のバランスに亀裂を起こし、各地でも様々な不安と混乱を生み出しています。

開発先進国と途上国との経済摩擦問題も解決せずに悪化の一途で、現在世界中では急激な産業発展により自然環境は破壊され、そして深刻な資源不足に陥っています。それどころか、まだ地域によっては貧困で食糧難に苦しむ国や自由や教育でさえもまともに与えて貰えない人達もいます。そこに追い討ちをかける様に今日大問題視されているアメリカを中心とした経済大不況の大津波。

次々と世界に歪みを生み出していく悪しき螺旋の渦は空を覆い尽くし、人々から希望の光を奪い去ります。絶望した人々は人生の露頭に迷い、生きていく為に悪事に手を染めてしまう者、食べていく為に他から財産や命を奪い取る者、中には自ら生きる事を放棄して自殺という決断をする者も後を絶ちません。

かく言う私もこの混乱の世に対し、教育こそが未来への希望を切り開く術だと信じてあえて『教育審議委員』と言う荊の道を選びこの身を投じたものの、度重なる諸問題に両足はズタズタに切り裂かれ血まみれとなり、正直もう疲れ果ててこれ以上歩けなくなっていました。もう辞めよう、諦めよう、自分に出来る事など一つも無いんだと、何度も何度も心が折れかかっていたのです。

しかし、そこに私達の前へ再び彼女が現れたのです。露頭に迷い希望を失いかけた私達へ再び自信と勇気を与えてくれたのです。あの時と何一つ変わらない、気丈な姿と高き信念を持って。

「……あなたは、あなたはどうしてそんなに強くいられるんですか？ どうしたら、あなたみたいな強い女性に……？」

世界を動かし、その足元に跪かさせた彼女の偉大な姿を見たあの日から、衝撃的な共感と感銘を受けた私はすっかり彼女に心を惹かれました。いつか私も彼女の様な人間になりたい、彼女の様に人々を正しい道へと導く高貴な存在でありたい、そう思ってこれまでの人生を歩んできたのです。

しかし、この時私はまだ自分の力が彼女の足元にも及ばないどころか、自らの思考そのものに欠陥的な甘さがあった事を再び思い知らされました。一体、どうしたら彼女の様な強く逞しい女性になれるのか、私はどうしても彼女の口からその答えを導き出して貰いたかったのです。

「……私が、強い？ さあ、それはどうかしら？ 怖いとは人から良く言われるけど、これくらいは人間として当たり前、誰もが生ま

れつき持っている心の強さだと私は思っけど？」

私の問いかけに、彼女はコクリと首を傾げて飄々とした表情で答えてみせました。自らの強さを当然の様に振る舞う彼女の姿に、驚愕した私はその言葉が信じられず更に彼女に質問を重ねました。

「……そんな、そんな事ありません！ 人間は誰しもその心に弱さを抱え恐怖に震える生き物です！ 私も、ここにいる人達も、みんな自分に自信を持ってなくて迷っている人達ばかりです！ それが高き知能を持つと同時に様々な煩惱も抱える事になった人間と言う生き物の本性だと思います！」

「……本性、ねえ？ うーん、私は人間学とか人生論とか良くわからないしさっぱり興味も無いんだけど、まあ、教育のお偉いさん務めてるあなたがそう言うんだからそうなのかもしれないわね？」

「……なのに、それなのに、あなたはどんな時代であっても、どんなに世界が暗闇に包まれても、決して希望の光を見失ったりはしない！ それどころか、あなた自身が光となって私達に未来への道を照らし出してくれている！ どうして、どうしてあなたはいつまでも光輝き続ける存在でいられるんですか！？ どうして……！？」

「……何か随分と大袈裟な話になってきたわね？ どうなのかしら、他人から見ると私はそう見えるのかしら？ うーん……」

「私もあなたの様に人々を導く強い存在になりたいんです！ お願いです、教えて下さい！ どうしたらあなたみたいな強い女性になれるんですか！？ あなたをそこまで強くさせるものとは、一体何

なんですか!？」

私の必死に懇願する姿を見て、彼女は困った様に肩をすくめて横に  
いる千春の顔に目をやりました。話を聞いていた千春の表情も何や  
ら困惑した様子で、どうやらその時の私の姿は周りから見ると確か  
に大袈裟で不思議な人だと思われるほど異様だったみたいです。

しかし、私が彼女と会えたのはあの日以来の事。奥井グループの株  
主総会に乱入した大デモ隊は、突入の事前にある人物（故人ですの  
で名誉の為に名前は伏せさせて戴きます）の首謀告白証言があり、  
それによって全員が懲罰を免れました。

しかし、このデモ隊を先頭に立ち引率した彼女は共謀者として一部  
の人達からその行為の責任を問われ、また彼女のあの発言に対して  
も賛否両論があった為、否定側の情報誌には非情なパッシング記事  
が書かれたのです。それにより彼女はこの騒動の沈着化させる為、  
周辺を執拗に嗅ぎ回るマスコミから身を隠す為に数年間を国外で生  
活する事を余儀なくされたのです。

私も騒動のほとぼりが冷めるまで長女をお腹に宿したまま夫と共に  
日本を出国して、それから五年後に夫の心臓の疾患の悪化に伴い療  
養の為に家族全員で帰国してくるまでの間をイタリアで過ごしてい  
ました。つまり、彼女と私はそれ以来の再会、憧れの人を前にして  
高揚し舞い上がってしまったのも仕方がなかったのです。

その長い間、私は一日たりとも彼女の事を忘れたりはしませんでし  
た。イタリアと言う日本の裏側にある国から世界の情勢を眺めてみ  
ても、彼女の言葉は確かに全てにおいて正しかったのです。やはり、  
平和とは私達人間一人一人の心構え次第なのだと。それを確信し再  
び強い感銘を受けた私は、いつしか彼女の様な存在になりたい、少  
しでも近づきたいと思うようになりました。

イタリアに在住していた頃から、自らがこれまでに体験し目にして  
きた人間同士による争い事の愚かさや悲惨な現状をまとめた著書を

幾つも執筆して、世界中の人々に命の尊さと平和の大切さを訴え続けました。日本に帰国してからもおそれらの活動に没頭し、次第にその努力が世間にも認めて貰える様になり、今日の私がいます。

全ては彼女に近づく為、彼女の様に人々の過ちを正して更なる高みへと導き、世界中に平和と安泰をもたらす強い女性になりたいが為だけに。

それでも、まだ何かが足りない。私に無くて彼女にあるもの。きっと、彼女にはその思想の礎となる教訓と経験があつて、それが心の支えとなつて屈強な精神力を保っているに違いない。その信念を少しでも垣間見る事が出来れば、私でも彼女と同じ様な強さを身につける事が出来るかもしれない。

「……その答えがここにある！ 私が目指していたものが、彼女から直接授けて貰える事が出来るんだ……！」

本心からそう思っていた私は祈りにも似た想いで、彼女からの答えを待ちました。自らの思想と存在を子供達を導く教育者に相応しいものへと向上させる為に、両手を結び、目を閉じて彼女の箴言を求めたのです。

「……ああ、そうそう、そういえばあのどスケベの女ったらし馬鹿男、松本新作は元気なの？」

「……えっ？」

しかし、そんな私に返ってきた彼女の言葉は、私の予想を遙かに超越した想定外のものだったのです。

「生きてんの？ それとも、もう死んだ？ しばらく会ってないし音沙汰も無いから全然こっちの事良く知らないのよ、どうなの？ 死んだ？」

「……あ、あの、いや、入院してますけど、とりあえず今のところは元気です……」

「ハア？ 何よ、まだ生きてんの？ しぶといわねえ、もう死ぬ、今死ぬって言い出して一体何十年経つのよあの男？ これ立派な詐欺よね、詐欺！ あなた、死ぬ死ぬ詐欺にあってるわよ！？ さつさと死んでくれれば世界中の女性がああセクハラの魔の手から逃れられるっていうのに、いい加減呆れるわね、全く……」

こちらが質問をしたはずなのに、逆に彼女から質問をされた私は軽く頭の中が混乱して会話の内容がさっぱりと理解出来なくなってしまう。一体、彼女の強さの秘密と私の夫とどんな関係があるのだろうか。しかも、中傷にも近い強烈な毒舌も添えて。私の疑問の念は更に深く深く海峡の様に脳裏に刻まれていきます。

「でも、良かったじゃないあなたは？ どスケベで変態なりにも自分を心から大切に想ってくれる男と結婚出来てずっと側にいてくれるんだもの、女として生まれてきて幸せよね？ 実際に毎日幸せで幸せでたまらないでしょ？ ねえ？」



「……えっ、あの、まあ、はい、幸せ、ですかね？ はい……」

「そうそう、この前仕事で日本に来た時に地方のサーキット場であなただの娘、お姉ちゃんの方にも偶然会ったけど、幾分身体の成長に支障があるみたいだけど性格や振る舞いは意外にしっかりしてたわ、忙しそうなのにちゃんと教育も出来てるのね？ 優しい亭主にかわいい娘、しかも二人でしょ？ 誰かどう見たって完璧な家庭環境じゃない？」

「……は、はあ、そうですね……？」

「だったら、あなたはこれ以上強くなる必要なんて一切無いわ、これまで通りに生きていけば問題無し、それだけよ」

「……えっ!？」

彼女に自分の家庭を褒めて貰えた事は正直とても嬉しくて、天にも昇る様な気持ちになりました。しかし、今一つ歡喜しきれなかったのはその後の言葉が気にかかってしまったからです。強くなる必要が無いなんて、そんな訳がない。私の力不足のせいでこの相談会は一度大混乱になりかけたのですから。しかし、彼女は言葉を返そうと前に乗り出しかけた私を制する様に、一足早くその会話の続きを語り始めました。

「どうやら見た感じ、あなたは一つ大きな誤解をしているみたいね、いい？ 人の強さというものはみんな一緒の形とは限らないのよ？ 人の顔、指紋、遺伝子がみんな違う様に強さも優しさも幸せと思

う感覚もみんなそれぞれ違うものなの、誰もが私みたいな人間になれば良いって話ではないのよ？」

「……違うもの……？」

「そう、私には私の強さがあつて、あなたにはあなたの強さがあるの、あなたは私みたいになりたいって言うけれど、逆に私は多分あなたみたいな豊富な知識と温厚な優しさを供え持った良妻になてなれっこないわ、そういう事よ」

「……でも、あなたは先程、人間としてのあるべき姿を取り戻せと、自信と自覚を身につけると……」

「それはね、何も人の真似をしると言ってる訳ではないの、人にはそれぞれの環境がありそれぞれの事情を持っている、そして、それに適応した強さをそれぞれが生きる為に身につけていく、ここにいる保護者の連中がやらかした行為だつて自分の子供を守る為にした一つの強さが起こさした行動だったのよ？」

「えっ！？ でもそれも愚かな行為だとあなたは……？」

「そうよ、あまりに愚かで醜い行為、強さというものを見誤つてしまった拳げ句の結果よ、強さというのは正しい面とそうでない面を持ち合わせる危険な諸刃の剣なの、ある程度の強さが持っていないければ自分の欲望を制御出来ずに悪行に手を染めてしまう、でも、有り余り過ぎる強さは幸せをもたらすどころが周囲の人間を傷つけ、最後には自らも破滅の道へと陥ってしまう事になるのよ」

確かに、必要以上の自信と自覚は人を驕らせ暴走させて、自分の思

想に属さない者達をその強さでもって力づくに押さえ込み占領しようとしてしまいます。実際にも歴史上にはその高き思想と完璧な理論で絶対的な名声と権力を手にしながらも、自らの強さに陶醉して我を見失い多くの罪の無い人々を傷つけ苦しめてしまった者達が何人も存在しています。

「強さとは誰もがそれぞれ違う形として持ち、自分自身を制御する為に必要不可欠なもの、でも、それは決して肉眼では見えない曖昧なものでもあるの、それを見極める為に人間は常に人生において学習と経験を積み重ね、良識と道徳心で身につけた心眼でもってそれに向き合うのよ、だからこそ、教育というものは人間にとってとても大切な存在なの」

「……じゃあ、私達は一体どんな強さを身につければいいんですか？ 私達に合った、私達それぞれの強さって……？」

私の度重なる質問の嵐に少し気疲れしたのか、彼女は肩をすくませ一つ溜め息を吐くと手に持った黒いノートファイルをポンと叩き、悩める私にとってもわかりやすい教えを説いてくれたのです。

「それは、あなた達が一番良くわかっている筈よ？」

「……私達が？」

「そう、本当は良くわかっているつもりなのについつい忘れてしまふ本来なりたいたいと思っている自分の姿、それがあなた達が求めている自分達の強さよ？ 周りの間違いに気づいているのに恥ずかしく

てそれを指摘出来ない自分、目の前で立っている老人に席を譲るべきなのに面倒臭がつて見て見ぬ振りをしてしまう自分、本当は仲良くなりたいのに周りがイジメているからそれに便乗してしまう自分、本当は愛しているのにその気持ちとは逆の行為をして家族や恋人を傷つけてしまう自分、それらの弱い自分を乗り越え、自分の信念をそのまま素直な気持ちで表に出せる様になった時、あなた達は真の強い人間へと成長する事が出来ると思うわ、たったそれだけ、それだけでいいのよ」

「……それだけ、ですか？」

「そう、それだけ、あなたはすでに素直な気持ちで心から夫を愛し、娘達を愛し、家族を愛している、だから、もうこれ以上の強さを求める必要なんて無いの、あなたの強さは誰もが容易に真似の出来るものではない、あなたにしか備わっていない立派なものなのよ？」

「……でも、私は……」

「……ふう、まだいまいち理解出来てないみたいね？ 人それぞれに違うそれぞれの強さ、その一例として丁度ピッタリなのが偶然にもここにいるわ、これよ、コイツ、この教育の場にちっとも相応しくないド派手な衣装の場違い女」

「ふえっ？ うえーん、ちょっと麗奈あー？ そんなに頭をグリグリしないであー？」

彼女は隣にいる千春の頭にポンと手をやると、まるで犬を撫で回す様にグルングルンと強引に回し始めました。彼女と千春は昔からの幼なじみと聞いてはいましたが、世界でも才能あるファッションデ

ザイナーとして有名になったあの『チハル・ミシマ』が彼女の前では完全に手懷けられたワンちゃん状態になっていました。

「この娘ももう四十を超えたいいオバサンだっていうのにね、未だにこんな奇抜で目障りなファッションに身を包んでとても年相応とは思えないだらしない喋り方をして、普通のオバサンがこんな真似してたら間違いなく周囲から偏見の眼差しを受けるわよ？　ところがこの娘の凄いところはそんな批評の声すらも上げさせないほど、実業家としても一家庭の主婦としても一人の女性としても全ての役目を完璧に成し遂げてしまっているって事、それはあなたもこの娘と付き合っただけで良く知ってるでしょ？」

「……は、はい、確かに……」

「それどころか、事業が成功して手にした莫大な資産に傲りを見せる事も無く、積極的に教育法人団体への資金投資やNPO団体への寄付を続けているのも流石の一言よ、自分がやれる事を全部きっちりやってんだもん、誰にも文句なんか言われる筋合いなんか無いわよね？　これが三島千春という一人の人間が持っている正しい心の強さ、人間としての理想的な姿と生き様の一つの見本よ」

「エッヘッヘ、麗奈に褒めて貰える何てスツゴい久し振りい！　超Happyな気分だわ！　やっぱり人生は思いつ切りEnjoyしなくちゃNon, non!」

「……後はこの馬鹿な喋り方だけ直してくれば何も言う事無いんだけどね、本当に残念な娘よ、全く……」

「だあゝかあゝらあゝ！　何でそうやっていちいち首傾げんのよお

く!? ヒドいよお、アタシは残念な娘じゃないよお!」

「……あーあ、どこで教育間違えたのかしら、ほんっと残念な娘……」

「残念じゃないってばあー!!」

千春を茶化して無邪気な笑顔を見せる彼女の姿を目にした時、私はやっとなある一つの答えに辿り着きました。彼女だって一人の人間、ただの普通の一人の女性であるという事です。決して彼女の言葉は神の下した箴言でもなければ厳格な戒律が刻まれた跡石の一説でもなく、私達人間誰もが持ち合わせている他人を思いやる優しさと他人を許す寛大な心を、もう一度世界中のみんなが再確認して欲しいという切なる願いが隠ったものだったのです。

他人を思いやり許す行為は思った以上に勇氣と力が必要です。だからこそ、人は常に道を外さぬ様に自らを厳しく戒め、学習を重ねて己を高め、それに必要な強さを身につけなければならないのです。どんな事に対しても、全力で受け止めてあげられる逞しい強さを誰もか持てば、きっと世界中の全ての争い事は終わりを迎える事が出来るでしょう。彼女の願いは、これまでの私達の先祖達が子孫達へ願い託してきた平和への祈りそのものだったのです。

「自分の強さを信じなさい、あなたは十分に強い、今、心に抱いているその気持ちを忘れさえなければ、いつか必ずあなたの想いは周囲から賛同されて、その志は子供達の教材となり人々を正しい道へと導くはずよ、自信を持って胸を張りなさい」

「……はい、ありがとうございます……」

その言葉に感極まり人目もはばからずに涙を流す私に、彼女は優しく微笑み一枚のハンカチを渡してくれました。その温もりは、とても『氷の女王』などという別名が信じられないほど暖かく感じました。私の彼女に対する見方は少しその角度が変わったものの、憧憬の心は更に深く私の奥底に刻まれたのです。

彼女に憧れその姿を追い続けてきて、本当に良かったと……。

「……あつ、そうそう、そういえばまだあなたの最初の質問に何も答えていなかったわね？ 私がなぜ、この強さをずっと持続しているのかって話」

私が涙を拭っている間にも、彼女は自ら私がした質問の答えを語り続けてくれました。周りにいる他の保護者達もどうやら熱心に彼女の話を聞いていたらしいのですが、その時の私には周囲が目線に入っていませんでした。彼女の姿しかその目に写らなかったのです。次はどんな有り難い言葉をかけて貰えるのか、私は期待に胸を膨らませて彼女の言葉に耳を傾けました。

「さっき、子供達は厳しい目線で親の姿を見つめているって説明したでしょ？ それと一緒に、私にも私の姿や言動一つ一つを厳しく見張っている存在がいるって事、弱々しい姿や愚かな失態を見せる訳にはいけないから、そうならない様に常に自分自身をなお厳しく戒めている結果よ」

「……厳しい目線、それはやっぱり、娘さんの那奈ちゃんや優歌ち

やんの事ですか？ 彼女達の人生の教材となる為に、麗奈さんは常に自分の言動に責任を持って……」

「うーん、まあ、あの子達の存在も確かにそうよね、母親として情けない姿は見せられないわよね、でもね……」

「……でも？」

「それよりもっと厄介な存在がいるのよね、私の周りには」

「……厄介？ まさかその存在って、あの奥井の関係者の誰かなんですか？ それともゴシップを嗅ぎ回るマスコミ記者ですか？ ただあの人達はそんな過ぎた昔の話を……！？」

彼女にとって厄介な存在と聞いて、私はすぐにあの因縁の一族の名前が出てきました。でも、あの事件はもう過去の出来事として忘れなければいけない話。それを自らが軽々と口にしてしまった事にハッとし、気づき後悔して申し訳なく俯くと、彼女はクスクスッと笑ってこう言ってみせたのです。

「奥井？ 未だにあんなよぼよぼの爺さんに寄りすがっているコバンザメ集団、当初から私の眼中になんて入ってないわよ？ 確かに以前一騒動あったとはいえ、今やあそこは私の研究開発資金を惜しげもなく出してくれる使い勝手の良いお得さんだもの、あんなもん大したもんじゃないわ、チョロいもんよ」

「……コ、コバンザメ集団？ チョロいもんで、奥井グループと言ったら現在でも泣く子が黙る世界屈指の大財閥……！」



「そんな甘ちゃん軍団なんかよりもね、もつと厄介で面倒で迷惑で失礼で常識を弁えない身勝手で理不尽で己の力に狂酔して自分が神か何かだと勘違いしてやりたい放題しまくっているクソ虫の中のクソ虫でクソ虫以下のヘド口野郎がいちいち私の揚げ足を取ろうとその腐った目玉をガラガラと光らせている最悪最低の大馬鹿者が私の目の前を我が物顔してウロウロして目障りで仕方ない！！あの非道極まりない俗物ゲス男の息の根を完全に止めるまでは平和の日々など訪れない、私は奴に対して一切油断も隙も与える訳にはいかないのよ！！」

「……あのー、麗奈さん……？」

穏やかな空気は一瞬にして緊迫状態へ。先程まで私に優しい表情を見せてくれていた彼女はすっかり『氷の女王』の姿へと変貌し、その厄介と言う相手に向かって次から次へと凍てつく様な強烈な一言一言を辺り一面に撒き散らしていきます。体育館内の体感温度は再び絶対零度まで引き下がり、周りの人達は彼女によって氷柱を垂らして真っ白に凍りつかされてしまいました。

「あの男はいつもそう！！私の思想ややり方に対していつも否定的な態度をとっては理不尽なケチや難癖をつけては指示に従わず身勝手でいい加減で無責任な行動ばかり！！多忙な研究時間と多額の開発費を重ねて苦労の末に完成した新型マシンをたった一回のテスト走行で跡形も無くぶっ壊してくれるし、私からわざわざ交流を絶っていた奥井との関係を公に引きずり出して更に悪化させてくれるし、バリバリ働き盛りだった私をたった一夜の関係だけで妊娠させて職場に行けない体にくれるし、それでやむなく世帯を構

えてみれば仕事はしない、育児も適当、料理も掃除も洗濯もちつともしないし、いざやらせてみれば何一つまともにも出来ない！！　それどころか、私が外で仕事をしてる最中もあの男は夜の街に繰り出して酒にまみれて女遊び三昧！！　こんな駄目の駄目の駄目三乗男が側にいて、私がやれ女だからだのやれ疲れたからだのと言い訳ばかりして自分の弱さを露呈出来ると思う！？　私はどんな時も常に強く逞しくいなければ、私の生活も娘達の人生も全部あの男の餌になつて根こそぎ喰い尽くされてしまうのよ！！　私は何も好きで強くなっている訳じゃないの、あの男より強い存在でい続けなければ、家庭も仕事も会社もチームも何一つ守つてあげる事が出来ないからなのよ！！」

「……麗奈さん、物凄く寒いでーす、凍え死にそうでーす……」

「ほんとにね、あなたや千春の家庭が心底羨ましいわよ！！　つて言うか恨めしい！！　スケベで変態のクセに旦那はあなたの事を一番に想ってくれているんでしょ！？　だったら、あなたは強さがどうのこうのだのこれ以上余計なものまで欲しがる必要なんか無いの！！　どう、これで良くわかった！？」

「……は、はい……」

「千春、アンタもよアンタも！！　あんな何の取り柄の無くて気持ち悪い見栄っ張りの若ハゲ男でも、ちゃんと素直にアンタの操縦通り動いてくれる都合の良い番犬に育ったんでしょ！？　だったら、アンタももう少し人並みにしっかりとしてその変な言葉使いや馬鹿なガキみたいな立ち振る舞いを止めなさい！！　もうほんとと見てていちいちイライラすんのよ！！」

「ひつどおーい！　いくらアタシでもお、虎太郎兄い兄いに比べた

ら可愛いもん……」

「シャラツープ……！！！」

なぜか突然怒り狂った彼女は手に持ったノートファイルを首刈り釜の様に振りかざすと、千春の脳天目掛けて容赦なくバシバシと何発もの鉄槌制裁を加えました。先程の自分を厳しく戒める等の発言は何だったのか、明らかにこの行為は人間の醜い一面をありのままに表現していました。

「私の目前でその名前は禁句！！ 禁句、禁句、禁句！！ 何が兄い兄いだって！？ いつからアンタは私に向かってそんな生意気な口を叩く様になったのよ！？ そんな悪い娘は制裁、制裁、鉄拳制裁の刑に処す！！ 今度はお尻よ、抵抗せずに突き出しなさい！！ 真っ赤になるまでひっぱたいてやる！！」

「痛い痛い痛あゝい！！ ごめんなさゝい、もう二度と言わないから許して下さい！！ ホントに痛いってばあゝ！！」

ちなみに千春は気に入った年上や同い年の男性に対してお兄ちゃんと呼ぶのが小さい頃からの一つの癖なんだそうです。実際に血が繋がっている兄妹という訳ではないのであしからず。虎太郎氏以外に風間貴之氏も兄い兄いと呼ばれていたとかいないとか。

しかし意外でした。彼女のこの強さを維持する為の秘訣とは、まさかあの人への対抗心と敵対心によるものだったとは。確かに、あの人妻として生きていくには相当な強さと逞しさが必要になるでしょう。言われてみれば、十七年前のあの時も彼女の傍らにはあ

の人の姿がありました。互いを常に意識をしてその強さを競い合う、この広い世界にはこんな不思議な夫婦もいたりするのです。

「あーあ、何か一気にスゴい気分が悪くなったわ、もうさっさと帰るわよ！ 千春、この後の私の凱旋帰国を祝った記念パーティーの準備はちゃんと出来てるんでしょうね！？」

「Don't worry, baby! 今回は歌舞伎町一の人気ホストクラブ店を麗奈様の為だけに完成貸切にしちゃいましたあー！ もう美少年系からセクシーワイルド系まで選り取り見取りよおー！？ お気に召したら一人でも二人でも何だったら全員Take outしちゃったって全然OKー！」

「あら、なかなか上出来じゃない？ 所詮男なんて女を悦ばす事しか出来ない役立たずのお荷物、この私が世間知らずの坊ちゃん達を一人残らず根本から教育し直してさしあげるわよ？」

「ねえねえ、美香も一緒にどお？ たまにはダーリンの事を忘れてハメ外しちゃうのも楽しいよおー？ やっぱり仕事で溜まったストレスは、外でバァーと思いつ切り発散しないと体に毒よお？」

「……いや、あの、私まだ、こつちに用が残ってるから……」

「そおなのお？ んもあ、せっかく会えたのにざんねーん！ 教育審議委員つてのも大変なお仕事なのねえ？ お疲れちゃーん、それじゃいっぱい頑張つてねえー？」

すみません。実はこの時、私は嘘をついてしまいました。本当はこ

の学校での相談会を最後にこちらでの全予定が終了してその後はフリーだったのですが、流石にこの二人と一緒にお酒を嗜む勇氣は私には無かったのです。何か、命と肝臓が幾つあっても足りなくなりそうな気がしましたし、それならまだ早く帰って夫と一緒に時を過ごした方がいいかな、と思ひまして……。

「さあ、今宵は徹底的に朝まで飲み明かすわよ!? 店内全てのアルコールを底まで飲み干してやるから、千春も最後まできっちり付き合いなさいよ!？」

「Rogerでございます! この三島千春、精魂尽き果てるまで麗奈様にお付き合致しますぞお!？」 ささつ、外に車を待たせております、どうぞごゆるりと心ゆくまでご休暇を満喫して下さいませませっ!？」

会場を立ち去ろうとする彼女に対して、周囲の保護者や学校関係者から歓声や拍手が上がる事はありませんでした。しかし、その理由は反発や軽蔑の心からではなく、彼女の演出した壮絶な大歌劇に完全に圧巻され、それ故に声を失い拍手をする事すらも忘れ去ってしまったからなのです。

その証拠に、彼らは背中を向け会場から立ち去ろうとする彼女に対し、誰もが最後まで尊敬の眼差しでその姿を見送っていました。あの意味大喝采よりも衝撃的な光景、私を含めこの場に遭遇した人々はすっかり彼女に心を奪われてしまったのです。

きっと、この後のホストクラブの人々も、彼女の振るうタクトに指揮された大協奏曲より『誰も寝てはならぬ』状態にされてしまったでしょう。彼女が通ったその道の後には、あらゆる全てが浄化された雑草一つすら残らない。私が人から聞いた言い伝えはどうやら真の

話だったみたいです。

『……人類よ、今こそ失ってしまった自信と自覚を取り戻せ……！』

しかし、私はやはり思うのです。彼女の行き着く先にこそ、人類が到達すべき真の世界があるのではないかと。彼女が導く先にこそ、私達に約束された平和な樂園が待っているのではないかと。彼女こそが『新世界』への扉を開ける運命の鍵なのだと、私は今も本心から信じてならないのです。

五月某日 松本美香

―完―

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3873f/>

---

ツアラトウストラはかく語りき

2010年10月10日17時30分発行